俺が望む最高のハッピーエンド

@ndante

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺が望む最高のハッピーエンド

【Ｎコード】
Ｎ８８８６Ｘ

【作者名】
@ｎｄａｎｔｅ

【あらすじ】
青春。
高校時代。
きっとこの時期に経験することはそれからの人生に大きな影響を与える。
一生の友人を得たり、誰かを好きになったり、そして後悔を覚えたり。

プロローグ（前書き）

この作品のエンディングは読む人にとっては納得行かない形になるかもしれません。
それをご了承下さい。

それでは私の処女作をよろしくお願いします。

プロローグ

今年の夏も例年通り茹だるような暑さだ。作業部屋である四畳半程度の洋室で、L字型の机に向かいながら、そろそろ扇風機だけじゃキツイか？冷房あった方が仕事捗るよな？などと、誰が聞いているわけでもないのに、言い訳を浮かべた。

「地球温暖化め…」

雇い主である父親から回されてきた仕事に、集中出来無いことを環境に八つ当たりしてみたが、そんなことで集中出来る筈もなく。

「はぁ休憩にしよう」

気分を変えるため、備え付けのミニ冷蔵庫からアイスコーヒーのペットボトルを取り出し、コップに注ぐ。勿論余計な物は入れない。

「そういやいつからコーヒーをブラックで飲み始めたんだっけか」

覚えていないがどうせ大人っぽいから、とかそんなくだらない理由だっただろう。今もあまり成長していないが、昔は今以上に子供っぽく、ちょっとした事でも自分の思い通りにならないと不機嫌になった気がする。

（学生時代は酷かったな。特に高校時代なんて…）

思い出して苦笑が出てくる。高校時代、特に後半は色々なことがあって、色々経験した。当然ながらそれが無かったら今の俺は居な

かっただろう。
逆に今の俺が当時の俺だったらもっと上手く立ち回れただろう。
それに新たな経験が出来るかもしれない。
（まぁ一回経験してるんだから当然か）
益体もない“もしも”の想像をしてしまったことにさらに苦笑を深くする。
いい経験だ、と言えるほど大人になった。しかし、それでも一つだけ心残りがある。
たった一つの約束、それを果たせなかったこと。その心残りが今も胸の奥で棘のように刺さり中々抜けてくれなかった。

◆

俺は今体育館にいる。
壇上で男女に分かれ歌を歌っている。
指揮者を見ながらたまに左右、男女が目でタイミングを合わせたりしながら合唱をしている。
そんな中俺は彼女と目を合わせ、笑いながら楽しそうに歌を歌っている。

俺は今廊下で呼び込みをしている。
今日は文化祭。
クラスの出し物の宣伝をするために駆り出されているのだ。
そんな中俺は隣で一緒に呼び込みをしている彼女と楽しく呼び込みをしている。

俺は今体育館で整列している。
今日は生徒総会だ。
新役員になってから初の生徒総会ということもあって、壇上の役員達は気合十分のようだった。
そんな中で俺は壇上にいる彼女を眺めながら眩しさとどこか寂しさを感じていた。

俺は今夢を見ている。
そう気が付いたのは何時だっただろうか。今見ていた光景は昔の記憶だ。
先日高校時代を懐かしんだせいだろうか、その時期をピンポイントで見せられた気分になった。

“藤田智之くん”

いつの間にか目の前に女性が立って居て、俺の名前を呼んでいた。
どこかで見たことがあるような、懐かしいような、胸が苦しいような、そんな気持ちにさせる女性だった。

“藤田くん、智之くん、智くん”

そう呼ばれて目の前の女性の印象が合致した。

“ごめんね？それと”

“ありがとう”

◇

『おい！聞いてるのか！？』

受話器越しに聞こえる友人の大声に意識が覚醒する。自分が一体何をしていたのかを思い出し友人に返事をする。

「あ、ああ聞こえてる」

友人は呆れたような声でこちらの様子を伺ってくる。

『信じたくもないのは分かるが気をしっかり持てよ？』

「ああ悪い、分かってる」

受話器の向こうで友人が一度唾液を飲む音が聞こえた。向こうも落ち着いているわけではないようだ。

「で、いつになるって？」

喉がやけに渇いて口の水分を無理矢理集め、飲み込み、たった今友人から告げられた言葉を自分に言い聞かせるように繰り返す。

「その…」

「夕紀の通夜は」

夢を見たその日、友人から彼女の訃報が届いたのだった。

ー大西夕紀ー

高校時代の彼女。きっと今まで好きになった女の子の中で、一番今の自分に影響を与えた子だと思う。
そのせいか、その後付き合う女性と夕紀を知らず知らずのうちに比べてしまい、頬を叩かれる経験も少なからずあった。
きっと誰にでもいると思う忘れられない存在。いつかまた、当時を若気の至りなどと笑いながら、お酒でも飲めると思っていた存在。
そんな彼女の通夜へ向かっている。

「あ、そこで停めて下さい」

タクシーを通夜の式場近くで停めてもらいながらも、なぜこんな事になったのか。と、友人から連絡を貰ってから今日まで、ずっと考えている事をまた浮かべる。

「遅かったな」

料金を払い、タクシーから降りてすぐ、後ろから聞き覚えのある声に呼びかけられた。

「幸宏か」

高校時代友人がほぼ居ない中、幼なじみなどを除いてほぼ唯一と言って違いない俺の友人。
鈴田幸宏。この優男とは当時そんな関係だった。まぁ当人は親友を

言い張っていたが。

「待ち合わせ時間ぎりぎりだぜ？」

「ああ、仕事が中々上手く行かなくてさ」

「おお、おおそれはご苦労様で。今何やってるんだっけか？」

ここ数年、殆ど顔を合わせていなかったとは思わせないその態度に、俺は苦笑いを隠せなかった。しかし、高校時代は茶髪でピアスと着崩した制服姿だったが、今は社会人らしく黒髪に喪服をしっかり着ていた。

「今は父親の会社の下でデザインをしてるよ。まぁ、オヤジが現場の人間だから色々融通効いてね。楽させてもらってるよ」

暗くなっていた内心を隠すように軽口で返す。あまり心配させるのも心苦しかったし悔しかった。

「お、あそこか…」

「…そうみたいだな」

お互いの近況など軽く確認していたら式場に着いてしまったようだ。

「あー…っと、それじゃまた後でな」

「？…ああ気を遣わせて悪い…」

「気にすんな。これも昔に比べれば、な」

「悪い…俺が呼んだようなもんなのに」

幸宏にこうやって心配されるのは一体どれほどぶりだろうか。

「こんな日ぐらい良いだろうに。なんでこうなるんだろうな…」

幸宏が言っているのは周囲、おそらく高校時代の同級生達が向ける視線だろう。嫌悪、侮蔑、憎悪、色々混ざってるが凡そ、そんな視線。視線の対象は俺だ。

「もう慣れたし気にすんな」

「だけどよっ」

そう言いながら、興奮しかけた幸宏を置いてその場を離れる。

幸宏と別れた後、一人記帳を済ませ焼香の列に並んでいる俺は、少しずつ前に進んでいく中、焼香台の向こうにいる喪服に身を包んだ一人の女性と眼が合った。

「…！？」

その驚き様を見る限りでは、どうやら俺が通夜に来るとは思っていなかったようだ。その女性、大西夕紀の母親は、俺が焼香する番になりお辞儀をすると、驚きに開いていた眼を涙で一杯にしながらしきりに頭を下げていた。

焼香も終え二階で幸宏を待ちつつ、出された食事に手をつけていると、見たことのあるような雰囲気の女性が近付いて来た。

「あんたも来ていたのね」

「まぁな」

学生時代よりも少し長くなった黒髪を後ろで一つに結んでいたが、

印象的なそばかすとつり目がちな目は当時の面影を残していた。
「良く来れたわね。あ、いや来るなって意味じゃなくてほら、ね？分かるでしょ？」
「まぁこの状況見れば分かるさ」
俺が座っている席の周りには誰も座っていなかった。テーブルに置いてある大皿のお寿司も独り占めだ。
「あ～、まぁお陰で見つけやすかったんだけどさ。言ってて辛くない？」
「もう慣れた。幸宏にも同じようなこと言ったな」
「お、居た居た」
「噂をすればなんとやら…」
嫌そうな顔と声で目の前の女性は振り返った。その先では人の良さそうな顔をした男が、こちらに向かって歩いて来ていた。
眼の前の女性、木村理恵は夕紀の幼なじみであり、俺も仲良くさせてもらっていた。
男で唯一の友人が幸宏だとすると女で友人でいてくれたのが理恵だった。
「さて、俺がここにいると空気が悪くなるしそろそろ…」
「待ちなさいよ」
「？」
立ち上がり、幸宏の方へと向かおうとした俺の腕を理恵は掴んでいた。
「夕紀のママがあんたに夕紀の顔を見て行って欲しいって」

「最後だから」

「！？」

最後にという言葉に今まで忘れていた感情が噴き出して来るような感覚が起きた。

「最後に…」

「そうよ。最後よ」

さっきまでの強気な表情を消し、真剣な眼を俺に向けながら言う理恵に何とか言葉を返そうとするがなかなか出てこない。

「おい、何してんだ？」

「…分かった。連れていってくれ」

「おいおい何の話だよ一体？？」

幸宏の声に背を押されるように、俺は覚悟を決めた。

「こっちに来て」

幸宏に事情を説明し三人で一階に降り、さっきまで焼香の列が居た横を抜け棺に近付く。

その際、夕紀の母親ともう一度あったり遺族と顔を合わせたが、きちんと挨拶出来たか記憶が曖昧だ。

そして遂に棺の横まで辿り着いた。

棺の顔の部分にあたる扉は開いていた。

そこから顔を覗く。

そこには俺の記憶より少し痩せ大人の雰囲気を持った大西夕紀の顔があった。

やはり夢で出てきた女性は夕紀が成長した姿だった。

とても綺麗に化粧され眠っているような顔で。

光を失った栗色の髪の毛。今は閉じられている、笑うと弓のようになった大きな目と薄い口。その口から二度と聞けない優しげなトーンの声。

それを見た瞬間俺の中で何かが決壊した。

「うっ…くっ……っ……あっ…」

そこで漸く、俺は大西夕紀という女の子が、もうこの世には居ないということを実感した。

「…」

流れる景色は式場を出る頃に降りだした雨に、濡らされながらも段々と懐かしさを帯びてきた。
ひとしきり友人の前で醜態を晒した後、俺はいつも使っている電車では無く、昔高校時代使っていた路線を使い家を目指していた。
哀愁というわけではないが、今日ぐらいはそんな事をしていいのではないか、と自分の女々しさを肯定した。
懐かしさを感じる中で、俺は夕紀との出会いを思い出していた。

（高校二年で初めて同じクラスになって、恋人の悩みを聞いたりしているうちに仲良くなって、それが切っ掛けでお互いに惹かれ合ったりして…）
（実は中学の時に同じ通夜に参列していたなんて事を付き合ってから知って、二人して運命だなんてはしゃいでさ）

そうだ、初めて夕紀を見たのは中学二年の春、知人の通夜だった。
中学一年の時たった数カ月しか一緒に勉強しなかったが、たまたま隣の席になって仲良くしていた病弱な子。

（あの子の通夜の時もこんな雨だったな）

“次は鎌子、鎌子。お降りの方はお忘れ物ご注意ください”
懐かしい響きの駅が近くなったなと意識を外に戻して景色を見ようとした。その時
ガツン

そうとしか聞こえない鈍く重い音と共に、ドアに寄りかかっていた体が何かに躓き引っ張られるように電車の進行方向に流れた。
そのまま俺は、迫ってきた地面、手すり、前の壁とぶつかり転がり滑った。

プロローグ（後書き）

高校時代。
この頃に経験する恋愛は良くも悪くもきっと心に深く残るはず。

第一話　二度目の出会い（前書き）

もしも願いが叶うなら

第一話　二度目の出会い

◆

教室は様々な声で賑わっていた。各々自分の机や、友人の机の周りで、自分の持ってきた予備の学校指定Ｙシャツに、自分の手や友人の手を借りたりして飾り付けをしている。

週末の合唱コンに着る自分の衣装を作っているのだ。

学校行事ということで、過度な装飾はできないが、各クラスそれぞれ曲にあった飾り付けをするのが通例だ。

『藤田くん聞いてる??』

俺は自分の椅子に座りながら、ぼーっとしていたようだ。

『ああ、悪い。で、何をすればいいんだっけか?』

『私のＹシャツに何か書いてくれる?』

ピンクの極太マジックを振りながらこちらを伺ってくる。

『了解。なんでもいいのか?』

『空いてるスペースだったら何でもいいよー。でもなるべく可愛いの書いてね??』

目の前に居るこの子は、こういった作業が楽しいのか、本当にニコニコとして眼が輝いている。

『これで…よし』

『なんて書いたのー??』

『ワライダケ』

『なにそれーーーーっ！！』

言っていることは否定的だが相変わらず顔は笑いっぱなしだ。

『藤田くんてそういう人だったんだねー。今まで気が付かなかったよ。おっかしいのー』

そう言いながら、笑いつつもこちらを非難してくるこの子は、本当に笑顔の似合う子だと思った。

◇

ジリリリリ！

「くっ…」

耳元でけたたましく鳴る目覚まし時計を、手探りで止めようとするが、いつもの場所に無い。

「？？？」

寝ぼけながら音の発生源を探してみると、窓のサッシに目覚まし時計が斜めに傾いて置かれていた。それも絶妙なバランスで。

いつもなら、枕の横にあるはずの目覚まし時計が、そんな離れた場所にあることに疑問を感じながら、スイッチを切り時間を確認する。

七時五分。まぁ仕事するにはまだ早い気がするが飯を食って、朝風呂浴びたら丁度良い時間帯になるだろう。

「しっかし変な夢を見たな…ふぁ」
脳に酸素を送るために欠伸が出る。
「ともーーー起きてるのーーー？」
「ん？？」
するとなんの幻聴か、母親が俺を起こす声がする。
「朝御飯食べる前に、顔洗ってきなさいよーーー！」
幻聴ではないらしい。母親が一人暮らしの俺を心配して様子を見に来たのか？いやちょっと待て、そんな習慣はなかったはずだ。急ぎの仕事でも持ってきたか？
仕事と言えば何時の間にベッドで寝たんだろう。昨日の記憶も曖昧だ。
「昨日は仕事が捗らなくて…」
思い出せる部分が仕事からというのが寂しいが仕方ない。浮ついた話しなんかここ最近出たこともない。女性といえば。
「そうだ、夕紀の通夜に行って…」
コンコンッ　ガチャ
「あら、起きてるなら返事ぐらいしなさい」
「あ、ああ悪い。考え事してて」
辛うじて返事をしたが、よくよく見ると違和感だらけだ。まず、今母親が入ってきた扉。見覚えはあるが俺の住んでいる部屋の扉ではない。次に、なぜか母親が少し若い。もっと中年太りというか、

ふくよかになっていたはずだ。急にダイエットが成功して痩せた？
そんな訳がない。
そして少し周りを見回せば。

「なんだ…？」

そこにあるのは、今はもう見ることもない俺の所持品や家具、以前住んでいた俺の部屋があった。

「起きたならちゃっちゃと支度しなさい」

と、言われ。周囲の違和感よりも先に目の前の問題に気が向いた。
なぜ母親が俺の部屋に居るのか。
何かの用事に俺が遅れたから迎えに来た？いや待て、何処かへ出かける用事なんかあっただろうか？だとすればなんの支度だろう？
と、少し考えたが。

「学校遅れるわよ？」

その言葉で今まであった違和感と、母親が俺の部屋にいる事に繋がり、一致したような気がした。
そうだ、今俺が居るこの部屋は、高校時代住んでいた家の自室そのままなのだ。
高校時代に幼なじみの気まぐれで買わされたテニスラケットや、カードゲーム。週刊誌に付いてきたグラビアのポスター。
そしてさっきの目覚まし時計の位置。高校時代は寝起きが悪く、いつまでも布団から出ない為、窓のサッシに時計を置き、寝ぼけ眼で止めようとすると床に落ち、延々と鳴り続けるというトラップじみた仕掛けにしてあったんだ。
何度目を凝らしても、そこにあるのは高校時代の部屋だった。

目が覚めたら高校時代の部屋で寝ている。何が起きてるのか分からないまま、学校に送り出された。
せめて自分の状況を調べようと高校までの道のりの中で所持品や携帯電話の日付などを確認すると、どうやら高校二年の夏休み明けのようだった。

（一体何なんだ？）

頭もすっかり起きたので、昨日の記憶を探っても、通夜のあと電車に乗ったところまでしか思い出せず。それに輪をかけて高校二年までの鮮明な記憶が混じり余計に訳がわからなくなっていた。

俺の通う鎌子高校は、最寄りの駅から少し離れた小高い山にあり、その一部を平らにしたような土地に建っている。
その為最寄り駅までは電車、その後はバス通学になる。勿論毎朝の満員バスが嫌な生徒は少し早く出て徒歩で通学することも出来る。
俺は少し遅い登校になったのでバスだった。

「ふぅ、取り敢えず学校には着いたが…」

バスが進む間も、懐かしさと苦痛に現状に対する困惑が入り混じり、微妙な心境だった。
しかし学校に着いた途端、そんな薄曇りだった心境も懐かしさが大

半を占め、少し光が差すようになっていた。
「おはよー」　「あ、おはよう」　「おはおは」　「おはよう」
校門から教室に向かう間にも色々な相手と出会ったりもして、この状況に対する気持ちはもはや限りなく楽しさに変わっていた。

「みんなおはよーう」

しかし、そんな心境が一気に落ち着いていくのを感じた。俺の後ろから廊下に響いたのはとても懐かしい声だった。

「おはよう」

聞こえるかどうか分からない返事を返したが、声の主は栗色のロングヘアーを靡かせながら、もう自分の教室に入っていった。そして、そこに俺も続くように入っていった。
〈二年三組〉
俺が高校二年の一年間使っていた懐かしい教室だ。
そして、友人である鈴田幸宏や木村理恵、そしてたった今同級生に元気な挨拶をして行った大西夕紀の居たクラスだ。

その日俺は、一日中自分に起きている現象について考えていた。
考えていて分かったことは。
まずなんの冗談か頭の中には二種類の記憶があった。一つは今から数年後まで生きた記憶。これから起こるであろう出来事や事件、そんなものを経験した記憶だ。どちらかと言うとこちらのほうが実感もできるし俺の記憶と言って良いだろう。今の状況に違和感を感じるのもこっちが主観のせいだろう。
もう一つは高校二年までの記憶。さっきあげた俺の記憶では曖昧

だったり、忘れていた記憶を、より鮮明に具体的に思い出すことが出来た。これは多分この身体の記憶なんじゃないかと推測した。随分思春期っぽい表現だが、区別しやすく分かりやすいのでいいと思う。俺は厨二病じゃない俺は厨二病じゃない…。

そして記憶の他にも色々分かった。

それはこの状況が夢でも何でもない、紛れも無い現実だということだ。

夢なら痛みを感じることはない。ということで、授業中居眠りしている感じを装い自然に頭を机に落としぶつけてみたりしたが、とても痛かった。そして心配された。

夢ならばその中で寝れば、起きた時は夢から覚めるだろうと思い、授業中、自然に居眠りしたが。目が覚めた時、眼の前には教師の顔があっただけで状況は変わらず、夢から覚めることはなかった。むしろあの恐怖は夢であって欲しかった。

この俺の状況は夢では無く、紛れも無く現実だということだ。

「そうか、これが夢じゃなければ…いや、出来の良い夢でも良いんだ」

俺は漸くここに至ってある事に気が付いた。

それは。

「もう一度夕紀とやり直せる。夕紀を俺の手で幸せにすることが出来る」

そんな事を思ったのだった。

そうは言ったものの、俺の記憶では夕紀と親しくなるのはまだまだ先だった。
時期的にもうすぐ始まる〈学内合唱コンクール〉そこで仲良くなり始めるはずだ。
それまでは接点が殆ど無いただのクラスメイトに過ぎない。どうにかして早く夕紀と会話をする必要があった。出会いや親しくなるスピードが早ければ早いほど夕紀との時間が多くなり思い出も増える。

そしてチャンスは思ったよりも早く巡ってきた。

◇

「それでは再来週末に開催する合唱コンのパートリーダーを決めます。まずは立候補。居ないかー居ないと先生決めちゃうぞー」

教壇の上では担任が緩く脅しを掛けながら教室を見回している。
窓際の後ろの方に位置する自分の席から周囲を観察しながら、そっと夕紀に視線を向ける。

（確か、夕紀はソプラノリーダーだったはず）

「はい！」
「お、大西。リーダーになるか？」

そうこう考えているうちに、夕紀は手を上げていた。立ち上がり手をあげた拍子に、栗色の髪がふわりと揺れる。元気が良すぎるせいか髪が後ろの男子に当たり、後ろを向き謝っていた。

「ごほん、気を取り直して…」

恥ずかしかったのか、顔を若干赤くしていた。それを誤魔化すためかいつもより余分に元気に声を発した。

「私と理恵が女子のリーダーやります！」

「え！？」

突然自分の名前を呼ばれたからか、女子とは思えない声が俺の斜め後ろからした。

「では女子ソプラノとアルトは決まったな。男子早くしないと帰れないぞ？」

「ちょっと先生！あたしはやるとは言ってません！」

振り返ると、肩口で切りそろえた黒髪を振り乱しながら抗議している。が、誰も聞いてはいない。

「おーい男らしくないぞー」

「ちょっとー、男は酷いんじゃないー？」

「そうよそうよ、理恵はちょっと男勝りなだけなんだからー」

「どっちにしろ二言はないだろー」

「あんたらは黙ってなさい！！」

周りのクラスメイトからからかわれているが、これもある意味人望だ。それに、反応するからからかわれるんだ。そう心の中で理恵に手を合わせた。

早くに夕紀と仲良くなるには、同じ立場になって、共有する時間を増やした方がいい。そうだ、こんなチャンスを逃す理由はない。

騒ぎが収まって、余計な邪魔が入らない内に、俺も手を上げる。

「んじゃ、早く帰りたいんで俺テノールやりますよ」

「それじゃ次のＬＨＲ（ロングホームルーム）までに、各パートである程度の歌い合わせはしておくように。では解散」

そう言って担任は教室を後にした。そして後に残ったのは俺と夕紀と理恵、あとはもう一人の男子リーダーだった。なぜか幸宏は俺の推薦を蹴り、早々に教室から出て行っていた。

「そういえば、あいつ…最近俺に声掛けてこないな…」

よくよく考えてみれば、俺がこの状況になってから一度も声を掛けられていない。今まではそんなことなかったのに。

「？藤田くん何か言った？」

「い、いやなんでもない」

危うく独り言の大きな変な奴だと思われるところだった。そんな変な印象は必要ない。

「それにしても藤田くんが立候補するとは思わなかったなー」

「確かに。藤田って言えばクラスでも大人しめで、言っちゃえば暗い方だと思ってたし」

「理恵！」

「あんたなんで立候補したの？」

「そんな言い方失礼だよ！？」

親しくなっていないクラスメイトからはそんな印象だっただろうと思う。まぁ一年次からのクラスメイトなんかとは騒いでいたので、よく観察していれば印象も違っただろうが。まぁでも興味の無い相手を、観察するわけがないのでそんな印象なのは仕方ない。

「いやーそうでもないよ。こいつ割りとよく喋るし？面白い事もたまに言うらしいし、な？」

もう一人の男子リーダーは、俺の事をどっかで聞いたのか、そんな事を俺に言ってきた。

「たまに、っていうのは全くフォローになってないだろ」

「ふふ」

その遣り取りに、クスクスと笑いを堪えているのは夕紀だ。横で理恵は訝しげに俺を見ているが気にしない。ここで理恵に突っ掛かって、夕紀に悪印象を与えても良い事はない。

そうこう考えていると、夕紀が好奇心を刺激された小動物のように、とことこと近付いて来た。

「藤田くんはまず髪の毛切りなよ。そうすれば少しは印象変わるんじゃないかな？？」

そう言って遠慮なしに、俺の前髪を摘んで少し引っ張ってくる。

今の髪型は、大分伸びていて前髪が眼にかかるぐらいだった。そういえば夏休みどんな髪型にしようか悩んでいて、とりあえずどんな髪型でも出来るように、と髪を伸ばしっぱなしにしていたら、夏休みが明けてしまったのだった。

「確かにあんたの髪型、暗そうな感じだもんねぇ」
「確かに見た目暗いな」

理恵の容赦無い突っ込みと、それに追随する男子。言っておくが、断じて名前を忘れているわけではない。ただ単にこいつの名前を呼びたくないのだ。俺の記憶では、最終的にこいつが切っ掛けで俺と夕紀は別れている。
我ながら器が小さいとは思うが、一年後を考えるとこいつとは今のうちに縁を切っておきたい。

「まぁ今日帰ったら美容院行ってみるわ」

そう言って俺が鞄を持つと、残された三人も鞄を持ち、その場の流れで一緒に教室を出た。

「どんな髪型がいいんだ」

男子Aと嫌々並び歩きながらそう呟いた。
俺等はバスには乗らず歩きで駅を目指しいた。バスに乗ろうとした俺を夕紀が歩こうと誘ってきたのだ。どうやら立候補した事が余程意外だったのか、そのお陰で少しは俺に興味を持ってくれたようだ。その時『最近少し体重が…』と言っていた。よく聞こえなかったが、誘うのを恥ずかしがっていたのだろう。
呟きが聞こえたのか、少し前を理恵と手をつないで歩いていた夕紀が、こちらに振り返った。

「バッサリ行っちゃいなよー」

手をハサミの形に動かしながら、笑顔でそう言った。
「ほら夕紀！後ろ向きながら歩くと危ないわよ！」
「わっ！？おっとと」
歩道の縁石に足を取られ、よろめいたが理恵が上手いこと引っ張り支えた。
「えへへ、ありがと理恵」
「もう慣れたわよ。夕紀のどっか抜けてるところなんて」
「あ、ひっどーーーい！」
そう言いながら、仲良さそうに握った手を振り回している夕紀を見ながら俺は決意を新たにした。

◇
「おはよう」
「うん、おはよー…」
次の日、教室で夕紀に挨拶をすると驚いた表情をしていた。
「わー…」
「髪、言われた通りに切ってきみたんだけど？」
「うんうん。なんか印象が変わっててびっくりしちゃったよ」
そう言いながら俺の周りをグルグルと回り始める。たまに『ほう

ほう』などと漏らしながら。
これは昔も言われたな、と少し感慨深くなった。
「それで、どうだろ？少しは良くなったか？」
「うん、今のほうがカッコイイよ」
「そっか、大西にそう言ってもらえて良かったわ」
「私に？なんで？」
「昨日木村が聞いてきただろ？パートリーダーに立候補した理由」
「うんうん」
夕紀に誉められたからか、二度目の出会いが順調だったからか。俺は何も考えずに今の興奮のまま喋っていた。
「実は大西と仲良くなりたかったからなんだよね」
「え？？」
「ずっと前から気になってて」
この時から、俺の思いとは裏腹に未来は歪み狂い始めた。そうとも知らずに俺は得意になって口を開く。
「でも、私彼氏いるよ？？」
「分かってる。でも仲良く出来るに越したことはないだろ？」
二度目の出会い。巡ってきたこのチャンスに、俺は自分では気が付かないほど焦り、浮かれすぎていた。そしてなにより自分の気持ちに振り回されていた。

「そうすればいつかチャンスが貰えるかもしれないだろ？」

「大西を幸せにできるチャンスが」

自分の失態にも気が付かないほどに。

第一話　二度目の出会い（後書き）

もう一度やりなおしたい

第二話　二度目の失敗

その日から俺は夕紀と話す時間をなるべく多く作るようになっていた。

「大西おはよう。今日はちょっと遅いんだな」
朝のＨＲが始まる前や

「あれ大西？今日は弁当じゃないのか？なにかオカズ貰おうと思ったんだが」
昼休み

「ソプラノの方は調子どうだ？良かったらテノールと一回合わせてもらえないか？」
放課後は勿論の事

「さっきの授業の最後の問題出来た？ちょっと教えてくれない？」
授業の間の少ない休み時間でさえも何かに突き動かされるように距離を近付けようとした。
しかし、そんな性急な態度の変化を周囲が受け入れてくれるはずはなく。次第に怪しくなっていく雲行きに周囲は警戒を強めたのだった。

「なんか最近あいつウザくないか？」
「あんな奴だっけ？」
「あからさま過ぎて気持ち悪いわ…」
「誰か止めなよ」
「確か一組にあいつの幼なじみが居るだろ。誰か呼んでこいよ」

そうして数日経った後、呼ばれた幼なじみに止められ忠告を受ける。

「待て待て待て。冷静になりなさい。そんなんじゃ逆効果だよ！」

そこで、漸く自分が予想以上に、この有り得ないチャンスに浮かれていた事に気が付いた。

「なにやってんだ…っ！」

放課後の教室で、窓から見えるテニスコートを眺めながら、肺に溜まった空気を全て吐き出すようにため息を付く。

俺と夕紀の関係改善は悪化の一途だった。ここ数日、放課後に学内合唱コンクールの打ち合わせなどをする時は声を掛けることが出来るが、それ以外の場面では理恵が睨みを利かし近寄れないようになっていた。

元々ニコニコと笑顔を絶やさず明るく、誰にでも気さくな夕紀は、周りの反応が悪くてもそれなりに会話はしてくれていた。それも、苦笑をしながらだったことに、今冷静になると気が付く。

だが今日になって、俺との話が彼氏にまで届き少し喧嘩した、と噂になってからは理恵がボディガードやＳＰのように、俺を見張る

ようになった。いや、これも冷静になれば当然の対応なのだが。

「これはどうしようもないな…」

「ホントにどうしようもないね～」

俺にとっては聞き慣れ過ぎて、もはや心落ち着くＢＧＭのように聴こえる緩い声で背後から話しかけられた。

「祐也か」

幼なじみである青木祐也だった。祐也は天然パーマがかかった柔らかそうな茶色い短髪を、風に揺らしながら俺を同じように窓へ近付いてくる。

「祐也か、ってのは酷いんじゃないかな？折角たまには一緒に帰ろうかと思って誘いに来たのに」

「部活どうしたんだ？テニス部だろ？」

「ん～、まぁ部活行く気分じゃないってとこかな？」

こいつにまで気を遣わせているな、と少し情けない気分になる。中身の年齢は成人しているのになんだか、こいつには頭が上がらないような気がする。

「んじゃ帰るか。明日になればまたいい考えも浮かぶだろう」

「トモ、お前さんはもう振られたんだからもう諦めなよ」

比較的親しい人間が使う“トモ”という呼び方。

そんな響きに少し元気を貰いながら教室を出た。もはや日中の白さを失い朱が混じっているリノリウム製の廊下を歩くと。

「あ、」

廊下の先、体育館に続く方向から声がした。

体育館と教室を結ぶ廊下。途中を曲がると階段がある。その階段よりも少し教室寄りに、部活のユニフォームを着た夕紀が居た。体育館から教室に向かう途中だったのだろう。だが、俺に気付き声をあげたようだった。

「大西さんってバド部なんだね」

横にいる祐也の呟きを聞きながら、俺は足早に夕紀とすれ違い階段へ向かう。

冷静になった今では、これまでの自分の行動が恥ずかしく思えて、まともに顔を合わせられなかった。

階段を降りていると後ろで、少し低い男性の声で夕紀を呼ぶ声がするのが聞こえた。

それは紛れも無く、夕紀の彼氏である先輩の声だった。階段に響くその声からなにやら剣呑な雰囲気を感じ取った。祐也は仕切りに振り返っていたが、それでも俺は足早に昇降口を目指したのだった。締め付けるような胸の痛みを感じながら。

◇

そして合唱コンクールは大きな事件もなく終わり、俺は夕紀との接点を失くした。二度目の出会いは最悪の形でスタートしたのだった。

そして、それからも関係の改善を望めないまま、秋になり高校生活の一大イベントとも言われる文化祭シーズンを迎えた。

◇

文化祭準備期間になり、俺もクラスメイトと教室で文化祭の為に作業をしていた。

「なんでうちのクラスは、こんな出し物なんだよ…」

クラスメイトが愚痴っているがそれも仕方ない。我がクラスの出し物は創作人形劇なのである。しかも脚本は担任。

「担任が童話好きな時点でなんかマズイ気がしてたんだよな俺」
「いい歳して童話ってなんだよ」
「まぁでも自分たちが出るわけじゃないだけマシじゃないか？」
「確かに。ホント、体育館借りれなくて良かったなぁ」

クラスメイトも口々に愚痴を吐いているが、担任は元々は演劇をやりたかったらしい。
だが体育館を借りられなく、仕方ないからといって教室で人形劇をやることにしたそうだ。
しかし、普通こういう出し物って生徒が案を出して多数決とかで決めないか？そんな疑問を飲み込んで、今はその人形劇で使うセット作りに勤しんでいるのであった。

「でも」

周囲の目が自分に向くのを感じた。

「藤田がこういうの作るのが得意で助かったな。設計から何から全部丸投げだもんな俺ら」
「ホントホント。中学じゃ技術の授業とかで工作なんかしたけどさ。いきなり舞台作れとか言われて無茶だと思ったぜ」
「助かったぜ藤田」
「…まぁうち父親が職人だから日曜大工ぐらいの規模ならよく作るし、なんとかね」
「お前を少し見直したよ」

そう言いながら、体育会系の男子が肩を思いっきり叩いてきた。このところの俺に対する不評は、男子に限り薄らいでいた。舞台などのセットを男子に割り振ったのは良いものの、中々作業が進まずにいた。仕事で施主にデザインを説明する時のように、その場でちょっと軽い設計図を作ってみたところ、それの評判が良かったのだ。完全に裏技を使っているわけだが。それで作業がうまく進むなら使わない手は無かった。

多少ぎこちないながらも和気藹々と作業が進んでいたのだが、その空気が一瞬で萎んでいった。

「男子しっかりやってるの！？」

家庭科室で人形作りをしていた女子が戻ってきたのである。近年、女性の自立志向による男性社会への進出、浸透は著しい物があり我々男性の威厳や立場といったものはゴニョゴニョ……閑話休題。

とにかく俺の居る学校も女子が実権を握り、男子は、なるべく逆らわないように動いているのである。それは生徒会役員がほぼ女子で構成されている事にも伺える。

そんな中では、いくら男子との間にある壁が低く、薄くなってきたとしても、女子との壁はどうしようもないほどになっていた。
男子もそれを分かっている為、女子が入ってきた時に、俺との距離を少し開けている。

「藤田もサボってないでしょうね？」
「木村、いくら俺でもこれ以上不評を買いたくはないさ」
「そう」

相変わらず理恵は夕紀のボディガードである。文化祭後の生徒会選挙にも付いていきそうだ。

（前の時はそんなことは無かったが今回は俺がやらかしたからな。有り得そうだ）

「理恵、流石にそれは言い過ぎだよ！」

理恵の後ろに居たのだろう。夕紀が前に出てきてフォローしてくれるが、そのフォローがまた周りの俺に対する目をキツくさせる。

「こっちは順調だから、ささ、お嬢様方はお人形作りにお戻りください」

多少の嫌味を込めてしまう事に、まだまだ俺も子供だなと思いながら退出を促す。

「ちょっとあんた！最近手の平返したように夕紀の扱いが雑になってない！？」
「付きまとって欲しいのか、距離をとっていいのかどっちなんだお前」

「なんか言った！？」

幸い俺の呟きは聞こえなかったようだった。なので、俺は再度退出を促した。

◇

そんなギスギスした日常を繰り返しながら迎えた、文化祭初日。
俺は教室のドアの横で、自分が設計した舞台で演じられる人形劇を見ていた。
真っ暗な教室の中、ライトに照らされている人形劇の舞台。横長の長方形に切り抜かれた舞台で、夕紀がヒロインを演じていた。
物語も佳境に差し掛かり、ヒロインが王子様に再会するところだ。

「僕はあなたともう一度出会うために幾つもの世界を渡って来ました」
「私なんかでは、あなたのような高貴なお方と釣合いません…」

この物語はファンタジーの世界に迷い込んだヒロインと、その国の王子様との王道恋愛物だ。
今は、自分の世界に帰ってしまったヒロインを追って、様々な世界を渡り歩いた王子が今漸くヒロインに再会したという場面だ。

（俺もこんなエンディングを迎えたいんだけどな…）

苦笑気味にそう思った。だがやはり現実は厳しいものだった。今考えても、当時すでにクラスの人気者であり、後の生徒会副会長として生徒を仕切る女の子である大西夕紀と、一般生徒で何の変哲もな

い帰宅部だった俺が、良くもまぁ付き合えたものだと思う。
（やっぱり俺達の巡り合わせって、色々と奇跡的な流れにあったんだな）
人生は偶然の積み重ねだ、なんて哲学的な事を考えていたら教室が明るくなった。
『ご来場の皆様。本日はお越しいただき誠にありがとうございました』
教室にマイク越しのアナウンスが響く。どうやらいつの間にか人形劇は終わっていたようだ。
お客さんが次々と教室から出て行き、後に残ったのはクラスメイトだけとなった。
今日の公演は今の回で終わりだ。あとは明日の打ち合わせや、今日の反省、今日の片付けを残すのみだった。

「それじゃあ反省これぐらいにして、また明日の一般開放ためにチャッチャと片付けちゃいましょうか！」
その掛け声と共に、女子は客席側から見て向こう側、舞台の付け根に隠して置いてあった人形を片付け始めた。
男子はガムテープなどで動かないように固定してあった舞台や設置してあった照明装置など重量がある物を運ぶため動き出した。
「舞台向こうに寄せちゃうから、そっちのガムテ外してくれないか

？」
「ああ、了解」

「あれ？人形一個足りなくない？」
「あ、舞台の下にあるよ。取ってくるね」

俺は客席側から舞台を照らしていたライトなど、照明器具を運んでいた。

「あ」

誰の声か分からないが、そんな声に振り向き見たのは、しゃがんだ夕紀の背中に倒れ掛かっていくベニヤ製の舞台だった。
いくらベニヤと言えども、骨組みは木材で組んであり舞台の横幅もそれなりにある為、男子三人ほどで動かすぐらいの重量がある。特に観客から演者を隠す部分は、重心を取るため少し重めに作っていた。
それが何故かバランスを崩し、ゆっくりと夕紀覆いかぶさろうとしていた。

「何やってんだっ！」

俺は持っていたスタンドライトを離し、舞台と夕紀の間に滑りこむように入り込んだ。

「くっ」

頭と肩、二の腕に舞台がのしかかる。が、それよりも気になるのは、入り込む時に捻った左手首だった。

「くっ…早く、舞台を、起こして、くれ…っ！」

男子三人で移動させるものを一人で支えるのはいくら何でも無茶だ。特に帰宅部で、非運動系の俺にはかなり無理があった。

「「「いっせー、の、っせ！！」」」

体半分に掛かっていた重みが無くなると同時に、体中から汗が吹き出してきた。

「助かった…」

脱力と共に尻餅を着く体勢になったが、すぐにズボンに付いた埃などを払って立ち上がる。すると男子がこちらの様子を伺ってきた。

「大丈夫か？怪我とか」
「あ、ああ。ちょっとびっくりしたけど平気だよ」
「それにしても良く反応出来たな！」
「おい、その前にコレ移動させてたの誰だ？」
「ごめん僕達が…」
「ゴメン…」

申し訳無さそうに謝ってきたのは如何にも文化系の二人だった。

「お前達が二人で運ぼうとするなよな！」
「い、いやみんな忙しそうだったから…」
「俺等でさえ三人で運ぶのにお前等で運べるわけ無いだろ！？」
「怪我人でたらどうする…」

そんな会話を横目に俺は背後を見た。正直、立ち上がってから男子に囲まれている間も、夕紀が怪我して無いか気になって仕方がなかった。だが、過剰な反応をすると前の二の舞になりそうで怖く振り向くことが出来なかった。

「夕紀、平気!?」

案の定理恵が一番に駆けつけていた。きっと過剰に心配していたら鬼のような形相でこちらを見てきただろう。簡単に想像できる。

「うん、大丈夫。少し驚いたけど怪我はないよ」

その言葉を聞いて、背後の音に集中していたのを気付かれないように教室を出ようとした。

(ふぅ、良かった)

「ちょっと!!なんでこんな重たい物を作ったのよ!」

「え?」

理恵の発言に男子が唖然としたのが分かった。前から理恵の夕紀に対する過保護っぽさはあったが、俺のせいもあり、最近はそんな行動や性格が顕著に現れるようになったと思う。

しかしこの発言は酷かった。元々女子に頑丈な作りを要求されていただけに、男子は信じられないものを見たような眼で理恵を見ていた。

俺は一回目の経験があるから、理不尽な罵声もあまり気にならないが。

「なん…だよそれ!」

他の男子は普段の扱いもあって少々沸点が低く設定されていたようだ。が、

「これの責任者誰！？出てきなさいよ」

理恵は取り合わず、さらに文句を言うために男子のリーダーを探し出し、吊るし上げようとした。男子は木村の放った因縁に今にも声を荒げそうな雰囲気だった。

そんな中、俺は教室を出ようとしていた足を止めざるを得なかった。

「俺だよ」

何故なら責任者は勿論俺だ。なんせ設計図から、部材の組み方まで、俺が指示していたのだから。

「あんた…っ！！」

理恵は明らかに敵意を持った表情で俺の方を向いた。流石にそこまでの表情を向けられるほどだとは思わなくて苦笑をする。

「こんな重くして、倒れて誰か怪我したらどうするつもりなの！」

「演じてる最中倒れないように、重心を下にしてるから、滅多のことじゃ倒れないんだよ」

「実際倒れたじゃない！」

「それは移動中の不注意だろ。設計上の問題でも作った男子の責任じゃない」

「責任者なら移動する時も注意してなさいよ！」

「重いから移動は左右一人ずつ、中央に一人で三人。出来れば運動

系の部活やってる人間で。そういう話はしてあった」
「それに…」
「俺は制作の責任者にはなったけど、この人形劇全体の責任者になったわけじゃない。片付けに関してはその責任者の仕事だろ」
「その証拠に俺は、照明の片付けを全体責任者である木村に言い渡されてたんだけど？」

正直、どちらもほぼ言いがかりに近かったがある程度の正論を含めながら言った。本来ならきちんと話し合うべきなのだが、頭に血が昇っている木村を落ち着かせる時間も俺には惜しかった。
周りの男子に目配せして、残りの舞台移動と落としてしまった照明などの片付けを頼みながら俺は木村に背を向けた。

「ちょっと、何処に行くつもり！逃げるの！？」
「今回のことを担任に報告してくるだけだよ。制作責任者としてね」
そう言って足早に教室を出る。ギャーギャー騒いでいるけど、俺が居なくなれば落ち着いて騒ぎも収まるだろう。こういう経験も、今となっては懐かしい。

ガラッ

「失礼します」

担任に報告を済ませ、その足で保健室に行くと先客が居た。さっき足早に教室を出たのは、保健室で手首の様子を見て貰おうと思ったのだが。

「あ、藤田くん…」
「…大西か。怪我してたのか？」
「ううん。ちょっと、ね」
正直気まずい雰囲気だった。ここ最近ほぼ会話もなく、被害者と加害者の関係のように暗黙で距離を取っていた為、沈黙が夕暮れの保健室を包む。
「保健の先生居ないのか？具合悪いならベッド借りたらどうだ？」
ぎこちないけど、なんとか以前のような口調になれたと思う。多少声が震えていた気がするが、取り返しは付かない。
「違うの。その…さっき助けてくれたでしょ？」
「…助けたというか、咄嗟に身体が動いたってやつだけどな」
「その時、藤田くん手首痛めてなかった？左手」
「っ」
夕紀に気づかせて気を遣わせるのが嫌だったから、ああ言って自然に教室を出たつもりだったのに、どうやら気が付かれていたらしかった。
「いや、元から左手で作業してたから、それでちょっと、痛めてたんだよ。俺左利きだしな」
慌てて嘘を言った割には、それなりに説得力がある嘘が出たと思う。確かに最近はのこぎりばかり握っていたりしたから、左手は筋肉痛だったりする。左利きだというのも本当だ。
「でも…」

「気にすんな。湿布とかすると周りが軟弱だ、とか茶化してきて、五月蝿いからしてなかっただけだから」

詐欺師になれるんじゃないか？と思うぐらいペラペラと嘘が出てくる。だが嘘も方便というやつだ。

「あ、じゃあじゃあ！せめて湿布は私が貼るよ！」

手首が痛いのをバレたなら仕方ないと、湿布があるだろう棚を漁っていると、夕紀がそんなことを提案してきた。

「いや湿布ぐらい自分で貼れるよ」

「藤田くんがそうやって嘘ばっか言うから、私も勝手に責任感じて湿布貼りたいの。お詫びさせて？」

「いや分けわからないからその理屈」

「嘘だよ！私見たんだから。藤田くんが私を庇ってくれる時に手を捻ったところ」

格好悪くて仕方なかった。助けに入って余計に怪我するとか、恥ずかしい所を見られていたとは。

「とにかく大西は何も気にすること無いから。な？」

「貼ります！」

「いや良いから！」

「貼る！」

「貼るな！」

そんな騒ぎを数分していたら、保健室のドアがなんの予兆もなく全開になった。

「夕紀、怪我したって聞いたから保健室に来たんだけど！！…何してるの？」
「あ、佑樹くん…」
先輩だった。夕紀の彼氏である。
「心配したよ、怪我はない？」
「うん、私は怪我しなかったよ」
「私は、って事は怪我人いたの？」
「藤田くんが私を庇ってくれた時に、ちょっと手を捻っちゃって」
「藤田…？」
我関せずの心で気配を消していた俺を、先輩が見るのが分かった。刺さるような視線を頬に感じる。
「藤田…そうか君が藤田君か」
夕紀と話をしていた時の温和な表情から一変して、剣呑な雰囲気を出す先輩に、夕紀も驚いているようだった。
「佑樹くんどうしたの？」
「君が夕紀にちょっかいを出していた、藤田智之君か」
「…」
なるほど、俺の事はフルネームまで耳に届いていたわけだ。事実だから言い訳も出来ないけれども、彼氏本人から直接言われると、ちょっと胃の辺りが痛くなる。
「で、君が夕紀を助けたって？実は自作自演なんじゃないのかな？」

「夕紀の気を惹くために」

一瞬頭がカッと熱くなったがすぐに冷えた。言われて気が付いたが、確かにそうとも取れる状況だった。舞台の設計、制作は俺の指示のもと行われ、その舞台が偶然夕紀に倒れてさらに偶然にもそれを俺が助けた。

自作自演などと言われてもおかしくない流れがそこにはあった。勿論邪推されればの話で、そんな気は無かったが、以前俺がした行動を知る人が、一度思い浮かべば十中八九信用するほどの推理だった。

「ちょっと佑樹くん！酷いよそんなって」

「夕紀は少し黙っていてくれないか。僕は以前から少し頭に来ていたんだ」

「…」

「何か言うことは無いのか藤田君」

前からこの人は苦手だった。とても大人で、理性的で、夕紀を大切に思っていて、夕紀と別れるその瞬間まで男らしかった。

◆

放課後、部活も終わり人がほとんど残っていない廊下に三人の影が伸びていた。

先輩は寂しさと悔しさで瞳を滲ませながら口を開く。

『夕紀、夕紀が藤田君を選ぶというなら、僕に何か悪い所があったんだろう。これからはそれを直して、夕紀がいつか昔話をする時少しでも自慢出来る元彼になるよ』

しかし声を詰まらせること無かった。

『夕紀、幸せになってね』

「大西さんにちょっかいを出していたのは事実です。気分を悪くさせて、すみませんでした」

「認めるんだね」

「はい、ですが。今回の件は事故です」

「…どうだかね。僕は君を信じられない」

「っ！？佑樹くん！！」

夕紀が必死に先輩を諌めるが、先輩は聞かず俺を見つめる。しかし、俺はこの場をどう着地させるかよりも、昔先輩が言った言葉が胸に刺さって、ジクジクと痛かった。

（誇れる元彼に俺はなれていただろうか）

（別れる最後まで夕紀の幸せを願えただろうか）

「聞いているのかい？」

意識を内側に飛ばしていた俺に、業を煮やした先輩が、少し近付

いて声を掛けてきた。そこで漸く意識が現実に戻り、考えていたことが霧散した。
そして、どうこの状況を切り抜けようと頭が回転し始めた。
（とは言ったものの、今俺に非はないはず。ここは堂々と帰ろう）
「なるほど、ここは若いお二人に任せて私はこれで…」
「馬鹿にしてるのかい？」
ダメだった。真顔で行けば多少強引だが行ける気がしたんだけど、真面目な先輩には効かなかったようだ。夕紀はそんな俺の態度に少し面食らっていたようだ。こういう修羅場は何度も経験しているため無駄に耐性が高いのが災いしたようだ。
「いえ、俺なんかに構ってるよりも恋人同士で、有意義な時間を過ごしたほうがいいのでは？という、率直な意見だったんですけど」
「ほら、大西さんもそう思って居そうですよ？」
「夕紀？」
急に振られた夕紀がしどろもどろになっている。その内に、素早く湿布を拝借し逃げるように保健室を出た。
背後から呼び止める声がするが、復活した夕紀がなんとか引き止めてくれているようだ。夕紀としてもここで事を荒立てたくないのだろう。
「なんか逃げる事多いな…」
そんな情けない事を思い返しながら俺は湿布臭くなった廊下を昇降口目指して歩き始めた。

夕紀と先輩が大喧嘩をしていると聞いたのは、そんな文化祭が終わってすぐのことだった。

第二話　二度目の失敗（後書き）

ファーストコンタクト、ファーストインプレッションってとても大事

第三話　二度目の後悔

「で、原因は何か噂になってるのか？」
「いんや、今回はちょっと根が深いらしい、ってぐらいしか噂されてないよ」
「そっか」

屋上へ続く階段に座りながら、昼飯用に買ったパンを片手に幼なじみから最近の噂話を聞いていた。屋上は閉鎖されているため、ここは滅多に人が通らない絶好の昼食スペースだった。

「トモが改心して大人しいから、原因が予想できないんだろうね」
「おい、失礼すぎるぞ」
「だって、それほど衝撃的だったから、あの時のトモ。急に人が変わったようになって、アレだったし？」
「そんな変わったか俺」

確かにあの日、突然高校生に戻った時から、冷静な行動を取れていたかと言えば自信がないけど。しかし俺と同じ状況になって冷静で居られる人間が居るだろうか。

「変わったと言うか、なんか急に大人になったと言うか、でもたまに子供っぽかったりしたり変な感じだったかな」
「？例えば？」
「大西さんに関する事だけ自信過剰と言うか思い込みが激しかったと言うかそんな感じだったね」
「あー…なるほどね」

前回の記憶があるせいで、余計な自信や油断があったのだろう。

「俺としても、いつトモが大西さんに惚れたのかが、分からないぐらいの急な変化だったし、聞いた時はビックリしたんだからね？」

まぁ確かに。本来ならあの時期は、まだ全然夕紀の事を知らなかったはずだからな。

それを未来を知ってる俺が歪めた結果が今の状況か。本当に自業自得だな。

「そのくせ、それ以外の事だとやけに落ち着いてて、言うことも的確だしさ？」

「そうだったか？」

まぁ中身は成人して数年経ってる社会人なわけだしな。ここらで一回俺の状況を洗いなおしてみるかな。

―名前は藤田智之。元々の年齢は二十六歳。大学卒業後、父親の会社に就職して、二代目となるように日々雑用をこなしていたと。会社はデザイン関係の仕事を中心にインテリアからエクステリアを扱っていた。まぁ所謂職人家系だ。

夕紀とは高校三年で別れたきり。とある事情で高校時代問題児とされて、嫌われ者になったので同窓会にも呼ばれず、そのまま一度も会うことはなく、あの日再会した。

そして二度目のチャンスに浮かれあんな失態を犯してしまったと。そりゃ今まで大して親しくなかったクラスメイトに、あんなこと言われたら気持ち悪いに決まってる。

そこまで思い返して頭を抱えていると、

「まぁ、でも最近はなんだか良い感じに落ち着いて、評判も悪くないよ？」
「は？」
「ほら、あの大西さんを助けたってアレ？なんか俺のクラスの女子が聞いてキャーキャー言ってたよ？」

ニタニタと笑いながら肘打ちをしてくる。しかしその顔も曇り、少し考え込み始めた。

「でもバド部の男子がちょっと変なこと言ってたかな」
「ははっ、今度はどんな陰口だ？」

人気者に手を出すと、吊し上げと言うか晒し上げというか、本当に大変だ。

「いや、あの事故がトモの仕業だとかなんとか。いや、俺はそれ聞いて笑ったんだけどね？」
「…俺の仕業…か」

なんだか夕紀と先輩の喧嘩の原因が見えてきたような気がした。こいうところが自意識過剰で自信過剰だとは思うけど。
夕紀は裏でコソコソするのが嫌いだったはず。陰口やら裏工作なんてもっての外だ。

「そんなトラップを予め仕組めるなんて、余程レベルの高い罠師じゃないと出来ないよ」
「祐也、お前はゲームのやりすぎだ」

しかし、予想が当たっていたら俺の行動が、周囲の人間を歪めている気がした。

夏以降まるっきり声を掛けてくることが無い幸宏や、過剰に夕紀を守ろうとする理恵、嫉妬や猜疑心に我を忘れているような先輩。
俺が変えてしまった人達を思い浮かべながらこれからの行動は慎重にすることを決めた。

（願わくは、これから先夕紀が幸せな未来に繋がりますように）

夕紀を一番傷付けている自分の事を棚に上げ、こんな独善的な事を願っている自分に苦笑いしながら、パンを口に詰め込む。

◇

「生徒会副会長に立候補しました大西夕紀です。よろしくお願いしまーーーす！！」

授業も終わり祐也と、その友人数人で体育館の下、ピロティになっているスペースを使っていた。そこで部活代わりに球蹴りして遊んでいたら、昇降口の方から大きな声が聞こえた。
ちなみに球蹴りというのはサッカーともフットサルとも言えないようなボール遊びだ。

「トモ、姫さまが選挙活動してるよ？応援しないの？」

忌々しいことに最近、祐也は俺が夕紀のことでも落ち着いているからか、夕紀のことで茶化していじる遊びを覚えたようだ。

「よく見ろよ。あんな所に俺が行ったら袋叩きだぜ？」
「ああ、親衛隊かぁ…」

夕紀の周りには〈生徒会副会長候補・大西夕紀〉と書かれたのぼりを持った、選挙活動を支援する集団がいた。勿論筆頭は理恵。その周囲にはうちのクラスの男女数人居て、バド部が一人、二人混ざっている。

「あれじゃやりづらいだろうな、あの子も」
「ああも周囲に睨み効かせられると、ちょっとね」

祐也の友人が言う通り、選挙活動を支援するはずが支援者醸しだすピリピリとした雰囲気のせいで、人が寄り付かない悪影響が出ていた。

「大西さんも良い人過ぎるよね、善意で手伝ってくれてるから断れないんだろうな～」
「本末転倒ってやつだな」
「そうそう、七転八倒だね～」
「……」

周囲の空気が和んだ所で、こちらが騒がしくなったから夕紀がこちらに振り向いた。

「っ」

息を飲んだのは俺か、横に居た祐也か。

「ありゃ重症かも」
「祐也も見えたか？」

何が原因でそうなったか、それとも色々積み重なってそうなった

のかは分からないが、夕紀の顔にはひどく疲れたような笑顔があった。いつもニコニコと周りを明るくさせるような笑顔ではなく。

「でも今の俺には何も…」

出来ない、という言葉を飲み込んだ。もう俺は近付く事すら出来ない。理恵は夕紀と先輩の喧嘩の原因を知っているのか、以前にもまして俺を厳しくマークしている。最近では俺の周囲に居る友人もそれとなくマークされているようだった。

「トモのせいじゃないから気にしちゃだめだよ？」

「ああ…」

とは答えたが、大元の原因は俺にあるだろう。そのことに気がついて励ましているのか、それとも単に俺を気遣ってなのか、やや天然が入ってる幼なじみの言動は分からないが胸が苦しくなった。

「生徒会副会長に立候補しました大西夕紀です。よろしくお願いします！！」

◆

夕紀は教壇の前に立ち、クラス全体に概要を説明している。

『今年から開催される、生徒会主催の球技大会の説明は異常です！』

この秋発足された新生徒会は異例の速さで初仕事を開始した。

それがたった今説明された〈生徒会主催球技大会〉だ。

『今年は準備期間が短かったから内容はあまり凝ったことはできないけど、来年は期待しててよね？』

その自信は何処から来るのか、女子の平均より少し小さい体型を目一杯大きく動かしながら、クラスメイトから挙がる質問に楽しそうに答えている。

『副会長さんになんでも聞いてよね！』

そこにはもう、ただ笑顔が似あっているだけの明るく人当たりのいい女の子の姿は無かった。それがとても眩しくて切なかった。

◇

廊下に張り出された、新生徒会役員の名簿を見ようと、数人の生徒が掲示板に集まっていた。

廊下の窓側に寄りかかり、人が少なくなるのを待っていた俺に横から声がかかった。

「よう」

幸宏だった。数カ月ぶりに声をかけられ、少し驚いたが、いつもだったら悪ガキのようにニヤニヤしている幸宏の顔が、やけに真剣だったので表情を整えた。

「どうした？最近忙しそうだったじゃないか」

「まぁ色々な…」

疎遠になったというわけではなく、忙しかったと言い換えたのは、俺なりの配慮だった。こうしてまた接点が持てたのだからとやかくは言うまい。

「張り紙見たか？」

「いや、人が多いから“待ち”だよ」

「そうか」

なにやら考え込んだ幸宏が気になったが、そろそろ人も少なくなってきたので張り紙を見るため腰壁から身を離す。

「あまり気にするなよ…」

そう言って幸宏は、現れた時と同じように静かに離れていった。

「気にする？」

何についてだろう、と考えながら新生徒会の名簿を見ると。

そこには大西夕紀という名前は無かった。その代わりに他の生徒の名前が生徒会副会長の横に書いてあった。

「これは…」

一体何が起きたのか理解が追いつかなかった。

俺の記憶では二年次、生徒会副会長は夕紀のはずだった。そこで夕紀は様々な企画や行事を決め、生徒にも、教師にも信頼される学校を代表するような生徒になっていった。

「その機会が無くなったのか」

原因は俺だ。どう思い返しても、事の発端は俺に辿り着く。あんな不自然な行動を取ったから、何もかも歪みだしたんだ。

昼休み、食事も終えて残りの時間をぼーっとしていると

「さてと～。今日はどうする？」

何処か抜けたような声で一緒に昼食を採っていた祐也が話しかけてくる。あの日から俺は、ずっと夕紀と距離を取っている。以前の全く逆だ。朝はなるべく遅く教室に入り、昼はすぐに教室を出て祐也や友人と合流し、放課後も教室に残らずさっさと昇降口へ行く。これ以上夕紀になにか影響を与えてしまわないように。

「さあな、またいつも通り気の向くままに球蹴りでもするかな」

「了～解」

そう言って祐也はボールを取りに校舎へ戻っていった。

祐也が戻るまで俺は、二階に位置する体育館の脇をぐるりと一周している通路から、外を眺めていた。

「…」

ここからなら校舎から来る祐也には目立つが、体育館の下のピロティや校舎一階からは見えない。すると他にも生徒が居たのか俺が居る通路を曲がった先から、女子の話し声が聞こえた。

「…さん、分かったわね？」
「でも、そんなこと言われても…」
「なに？先輩の言うことが聞けないの？」

何やら先輩が後輩をいびっているようだった。

（学生生活は人生の縮図なんてよく言ったもんだな。ＯＬみたいだ）

「あんたが現れなかったら佑樹だって私を捨てたりしなかったんだから！」

女のヒステリックはきっついな、なんて思っていると相手の女の子が喋り始めた。

「先輩は間違ってますよ…本当に好きなら私をどうにかするんじゃなくて自分が変わらなきゃダメですよ…」
「くっ！！」

バチンッ

そう音がすると足早に去っていく音が聞こえた。それにしても、何処かで聞いたことのある声だった。少し顔を見ようと足を踏み出した所で。

「トモ～早く下に降りて来なよ～」

状況を見ていたかのようなタイミングで祐也が俺を呼んできた。通路の向こうの女子に、立ち聞きしていたことに心の中で謝りながら、無言で祐也の呼んでいる場所へ向かった。

その後も俺は同じサイクルで日常を費やしていった。
今の俺にはそうして被害を小さくする事しか考えつかなかったし、出来なかった。

しかし、一度歪んで縺れた関係はそう簡単には元に戻らなかった。

「藤田！」
「んあ？」

高校二年の目玉である修学旅行も、男子とはっちゃけてグズグズに終わり。今日で期末試験も終わったところだったので、放課後の今は精も根も尽き果てた状態だった。なので、間抜けな声が出ても仕方ないのである。

「あんたのせいで…っ！！」
「なんなんだ？テスト疲れであまり話をしたい気分じゃないんだけど」

自慢の黒いショートカットを、プルプルと震わせながら声を荒らげたと思ったら、今度は何かを堪えるかのように声を搾り出すように理恵は言った。

「夕紀が先輩と別れたわ！」
「は？？」
「さっきあたしの所にメールがあったの！今日で先輩と別れたって

！」

なぜ？と言う言葉は発せられなかった。理恵が俺のところに来た事からしても明白だったからだ。

「でも、俺はもう関わってないぞ？」

「あんたは気が付いていなかったかもしれないけど、ずっと監視してたのよ」

「誰が？」

「先輩が…」

少しの無言の後、理恵が今までの鬱憤を晴らすかのように喋り始めた。

「修学旅行。あんた男子とずっと一緒だったでしょ？」

「ああ、男子と居るほうが楽だったし」

勿論嘘は言ってない。高校生活で女子との色恋沙汰が無ければ、一番機会が多いのは同性同士での馬鹿騒ぎだろう。特に前回の高校生活での反動からか、最近は友人との時間を目一杯楽しもうとしている。

「その男子の中に先輩が監視を頼んだ人間が何人か居たのよ…」

「え？」

なぜ？と言う疑問と、どうして？と言う悲しみが浮かんだ。

「生徒会選挙に落ちてすぐ、修学旅行があったでしょ？だから、傷心の夕紀をあんたがちょっかい出すんじゃないかって」

確かに役員発表と修学旅行の間には、中間テストを挟むだけでほとんど間隔はない。

「テストもあったから夕紀とあまり話せなかったんでしょ。それで修学旅行。三泊四日とは言っても、自分の目が届かない所へ、あんたと夕紀を行かせるのが嫌だってね」

「でもそんな気はさらさら無かった」

「あんたはそうでも、先輩は違ったのよ。ほら、文化祭の時あんたが夕紀を自作自演で助けたって前科もあるし」

「自作自演なんかしてないぞ！」

「でも証拠がないから…」

「証拠なら！自作自演って証拠も無いだろ」

「そうなんだけど…」

言っていて自分の話がおかしくなっている事を薄々気が付いたのか、理恵は話し始めた補機よりも少し大人しくなってきた。

「とにかく、それが夕紀にバレちゃったのよ。誰がバラしたのか分からないけど、夕紀が先輩を怒って泣いての大喧嘩。私も一度は宥めたんだけど、実はそれ以前からもちょくちょくあんたの事をクラスの男子に聞いていたらしくて。それのせいで夕紀がもう聞く耳持ってくれなくて…」

「正直なんであんたなんかを庇うのか分からないけど、今思えばなんであんたをこんなに責めていたのかも、分からなくなってきたわ…」

疲れをため息と一緒に吐き出すかのように、理恵は肩を落とした。

「そうだったのか…」

道理で俺について詳しかったはずだ。今思えば文化祭の時も、何故だか先輩は俺が舞台を作ったことを知っている雰囲気だった。アレも、クラスのバド部に聞いていたのだろう。

「理恵！こんな所に居たの！」

俺と理恵が、二人して何とも言えない空気になっていると、理恵が開けっ放しにした教室のドアから、夕紀が現れた。

「夕紀…」

驚く理恵をよそに、夕紀は足早に机の間を抜け、理恵に近付き手を取った。

「早く帰ろ??」

夕紀は俺の方を一切見ず、理恵を引き摺るようにして教室を出ようとした。

「大西」

思わず掛けてしまった声に、夕紀は一瞬ビクンとして立ち止まった。理恵は余計なことを言うなといった面持ちでこちらを見てくる。

「…なにかな？藤田くん…」

「…」

理恵も思わず息を飲む中、俺は何も考えず口を開いた。

「大西、木村。また明日な」

これが俺にとって夕紀に掛けた最後の言葉になった。

◇

一年と四ヶ月後。

あの日声を掛けてから俺は、それまで通り男子を中心に高校生活を送った。

あの日から変わったことと言えば、夕紀の周りに居た親衛隊のような女子集団から、目の敵にされなくなったことぐらいだ。

それも最早なんの意味もなかった。何故なら俺は、あの日を境に夕紀とその周囲から積極的に距離を取り、学年が上がった後はクラスも離れたことから、余計に接点が無くなったのである。

そして今日

俺達は卒業の日を迎える

二度目の後悔を胸に秘め

俺は卒業をする

しかし、この時の後悔が数年後、さらに激しい後悔に成長することになった。

第三話　二度目の後悔（後書き）

距離を取ることが正解とは限らなくて

第四話　二度目の結果

その日、俺は仕事を終え家に帰って来ると、郵便受けに一通の葉書が入っていることに気が付いた。
大学進学と共に実家を出て、隣の市で一人暮らしをしている俺に、私的な手紙が届くことは珍しい。郵便があっても毎月の支払等の封筒などだ。
その珍しい手紙は黒い枠で縁取られた少々暗い印象の手紙だった。内容は少なく、日時と場所、そして一つの苗字に数人の名前が連なっていた。
それは大西夕紀の通夜の案内だった。
その手紙の内容に頭が追いつかないのは、前回の通夜は、同級生と疎遠であり幸宏経由で通夜を知らされていたからだ。

「なぜ…？」

良くも悪くも、前回と違う道を辿ったはずなのに、なぜ、また夕紀が死ななければならないのか。そう考えながらも思考は通夜の日、仕事を休ませて貰うため電話を掛けていた。

◇

通夜当日、幸宏に連絡を入れようとしたが、この幸宏は、一度目のように俺が夕紀に紹介してないから接点は薄いんだ、ということに気が付いた。

（それに、元クラスメイトだし同じように案内来ているだろう。会場に行けば会えるさ）

そして通夜はしめやかに執り行われた。通夜に参列する人数は、前回よりも心なしか少なくなっている気がした。

（これも俺が与えた歪みのせいか…）

前回は生徒会副会長に就任し、持ち前の優しさと、気さくさ、明るさなどに加えて、自信や、経験を積み、人脈も増え人として一皮むけたと言ってもいいほど変わった、今回それらの機会を、俺が潰してしまった。

通夜に来る人の数で、その人の人生の幸せを計れるとは言えないかもしれないが、その変化を仕方ないなどと、無視できる性格ではなかった。

元クラスメイトや夕紀の家族に挨拶をして会場を出る。前回と違った意味で俺がそこにいてはいけないような気がしたからだ。

「ふぅ…」

手に持った、会葬御礼の紙袋を握り直し駅のホームで電車を待つ。

「よう」

後ろから多少気さくな、しかし声色は若干低めな声で呼びかけら

れた。
「ん？幸宏か」
「なんだか早い帰りだな。もういいのか？」
「まぁな、なんだかあの場に居づらくて」
「そうか」

そう言って幸宏は、静かに俺と並び立つ。隣に立つと分かるが幸宏は俺より数センチ背が高かく、学生時代は茶色だった髪も黒く染まっていた。

「…」
「…」

自分よりも背が高く、昔と違って優男風ではなく、眉間にシワを寄せた厳しい顔をしている相手が、横で黙っているのはただでさえ重い空気をさらに重くさせる。
そんな、なんとも言えない雰囲気を掻き消すかのように、電車がホームに滑り込んで来た。

その後も、俺達は会話を交わすこともなく、無言で窓の外を眺めていた。

「…俺は乗り換えるけど幸宏はどうする」
「…俺もそっちに気になる事があるから…」
「そうか…」

俺は、高校のあった場所の近くを通るように電車を乗り換えた。

なぜかそこに行かなかればいけないような気がしたのだ。女々しいかもしれないが、懐かしい景色に夕紀の姿を追っているのかもしれなかった。

乗り換えてから数分後。

「雨…降ってきたな」

幸宏が窓から外を見ながらそう呟いた。確かに窓にポツリポツリと水滴が当たり、斜めに流れていた。

「前もこんな雨の日だった…」

「え？今なんて」

景色に集中していた俺は、幸宏が呟いた言葉を聞き取れず聞き返そうとした時

“次は鎌子、鎌子。お降りの方はお忘れ物ご注意ください”

いつか聞いた懐かしいアナウンスが流れた。

その音声と、金属同士が擦り合うような甲高い音を聞きながら

俺は、突然の衝撃に宙を舞った。

第四話　二度目の結果（後書き）

出会いから失敗して後悔した結果はやっぱり悔しくて

第一話　三度目の悪戯

◆

すでに、二人の結末は見えていた。それでもまだ俺は、大丈夫だと自分に言い聞かせながら、この関係を続けていた。

彼女を気遣い、大切にしながらもすれ違ってしまったこの数ヶ月。

『もう、私達…終わりにしよ？』

放課後、二人の関係が始まったこの二年三組の教室に、呼び出された時から予感はしていた。そして今、俺は彼女に別れを告げられていた。

『なんでそれを選んだのか。理由は聞いていいか？』

その理由も分かっている。が、俺はそれでも彼女を信じたかった。

『私、聞いたの……影で私の悪口を言ったり、私を笑ってるって』

俺は目を瞑り、黙ってそれを聞いていた。

『あと、私が佑樹くんと別れるように色々と手を回していたとか…それと…』

その言葉の後に続く事については、多少疑っているのか語尾が弱々しかった。

『浮気してるって…証拠もあるの』

そう言いながら彼女は、足元に置いた鞄を見る。

『あなたを信じたかったし、こんなこと信じたくなかったけど…こんなものまで出てきて…もう、私どうしたら良いか分からないの！』

俺はこの状況を作り出した相手に、悔しさ、憎さを通り越して、ある種の賞賛を与えてしまった。

よくもここまで騙し込んだ、と。

『そうか…分かった』

俺は、もう既に逃げ道が塞がれているのを悟った。

『すまない…こんなことになって』

『っ！』

彼女は、俺の顔に浮かんだ諦めの表情を、どう感じ取ったのだろうか。

そんなことを考える暇もなく、彼女は俺の頬を叩いていた。

『なんで言い訳もしてくれないの…信じてたのにぃ…』

彼女は大きな目に涙を浮かべながら叩いた手を反対の手で握った。手に残る痛みを抱きしめるように。

『ごめん』

言い訳は出来なかった。なぜなら、もうすでに取り返しの付かない所まで来ていたのだから。

そう言うと俺は、彼女の横を通り過ぎ教室を出た。すれ違う時に

もう一度、心の中で謝りながら。
教室を出ると彼女の声が聞こえた。声を抑えずに大声で泣く声だ。
そんな声を聞き、俺の視界は僅かに歪んだ。
しかし、涙を零すわけにはいかなかった。
何故なら、教室を出たすぐ脇に憎むべき相手が居たからだ。

『今までご苦労さん』

語尾に音符でも付きそうな声でそう言う男こそ、俺を陥れた張本人だ。

『こっから先は俺に任せてよ。元・彼・さん』

瞬間、頭が燃えるように熱くなったが

『おっと、手を出しても良いのかな？また指導室に呼ばれるぜ？？』

きつく握った手を振り下ろす事が出来ずに、俺は歯を軋ませた。

『あ、お前の教室ちゃんと片付けておけよ？じゃないとまたクラスメイトに笑われるぜ？』

そう言いながら俺の肩を叩き、今俺が出てきた教室に入っていった。
俺は一度深呼吸をして自分を落ち着かせると、自分の教室に戻るために一歩踏み出した。

俺は教室に戻ると、すぐに雑巾を片手に持ち掃除を始めた。

まずは俺の机にマジックで書かれた落書きを消していく。
―死ね―　―消えろ―　―強姦魔―
―人間のクズ―　―最低―
どれも俺を中傷する内容だ。シンナーを軽くつけた雑巾で拭いていくと次々と消えて行く。一度教師に掃除用のシンナーを借りていた所を見つかり、危うく退学になりかけたこともあった。

『よし…』
『よし。じゃないだろ』

もう放課後になってかなりの時間が経っている。この階には誰も残っていないと思っていたので少し驚いた。

『まだ残ってたのかお前』
『このままでいいのかよ…』
『…どうしようもないさ』

薄く笑う。本当にどうしようもないんだ。すべての噂が嘘だったとしても、そこに偽物の証拠を持って、説得力と真実味をもたせるのがあいつのやり方だった。
そこに俺が何を言っても話は通じない。この数カ月でそれを痛いほど知った。

『でもよ、彼女にちゃんと説明すれば！』
『駄目なんだ。あいつの作った証拠を持って別れ話をしにきたんだ』

そう、彼女は証拠を持っていた。それがなによりも辛かった。あいつの話とその証拠を多少なりとも信じてしまったのだ。

『何とかならないのかよ！くそっ！』

そう言いながら教卓を蹴ると、中から様々なチラシが出てきた。
どれも俺を責める文章の書かれた物だ。

『くっ』

それを見てさらに顔を歪ませる。そんな表情を友達にさせるのが申し訳なかった。

『悪い、黒板消すの手伝ってくれないか？』

しかし、気を紛らせる為に選んだ手段も、友人の顔を歪ませることになる。

『これがクラスメイトのすることかよ…っ！』

そこにも俺を中傷する為の文字が色鮮やかなチョークで書かれていた。

『悪いな、手伝わせて』
『いいからっ！こんなの早く消して帰ろうぜ！』

二人がかりで掃除をしたのでいつもより早く済んだ。
昇降口で靴を履き替えていると

『俺、あんな奴と絶対くっつけさせないからな』

そんな声が下足入れの反対側から聞こえてきた。

『ああ』
『それに、俺が二人の間に立ってやる』
『二人がいつか和解出来るように、ずっと二人の親友でいる』

その言葉に俺は黙って頷いた。口を開けば今にも嗚咽が漏れそうだった。

（いつかきっと）

俺はその時を夢に描いた。

◇

夢を見た。それはとても懐かしくて悲しい夢だった。眼を擦ると少し湿り気を感じるほどに。

何が夢で、何処までが夢なのかは分からないが、俺はまた見知らぬようで、見知った天井を見つめている。

「また…なのか…」

目覚まし時計を探す。枕元にはない。ついと視線をベッド横の窓に向けると、そこには斜めに立てかけられた目覚まし時計があった。

どうやらまた過去に戻っているようだ。

時刻を見ると以前より少し早い六時五十分頃。一度経験しているせいか、少し落ち着いていおり目立った混乱は無く、ただ困惑だけが色濃く残った。

「とりあえず今度はいつ頃に戻ったんだ？」

季節は夏頃だろうと軽く予想できる。何故なら着ている服や、ハンガーに掛かっている制服が夏物だからだ。気温も朝にしては少し蒸す感じがする。

日付を確認するために携帯電話を開くと、メールが何件か溜っていた。一番新しいメールはついさっき届いたようだ。差出人は幸宏だ。内容は簡単に朝の挨拶や、放課後遊びに行かないかなどの誘いだ。一件何の変哲もないが俺は少し違和感を覚えた。しかし、その違和感が何だったのか分からないまま朝の支度を開始した。

季節はまた二年の夏だった。前と同じく合唱コンの少し前。

「前回のようなみっともない真似は絶対にしない」

そう決意しながらYシャツの袖に腕を通した。

学校の最寄駅に着くと、周りは一面学生だらけだった。うちの学校の生徒も居れば、近くの私立高校の生徒もいる。うちの学校は公立で規則も割りと緩い方なので、髪型や色なんかが自由だ。今は夏服なのでYシャツ姿が多いが、冬になればブレザーを着ることになる。

今日は割りと早い時間に着いたので、徒歩で学校に向かうことにした。学校へ向かいながらメールのチェックなどをして、当時の自分を少しでも自然に出せるように心掛けながら。

途中何度か知り合いに声を掛けられたが、無難に対応できただろう。

学校に着き、教室に辿り着いた頃には、時間も丁度いい具合になっていた。

「おっはよー」

「おはよう」

教室のあちらこちらから挨拶の声が聞こえる。

「よう、おはよう智之」

「おはよう」

いつからそこに居たのか、幸宏が声を掛けてきた。どうやら今回の幸宏は、俺の馴染み深い幸宏のようだ。前回は何かおかしかったのだが、あれも俺の行動のせいだったのかもしれない。

「で、今日の放課後カラオケ行くか？」

「まだ始まっても居ないのに放課後の話かよ。気が早いな」

「放課後の楽しみを作っておかないと、学校なんてやってられるかよ」

完全に勉強を諦めた人間の言うことだ。周りの男子も数人頷いているのは見なかったことにしよう。運動系ばかりなのもこの際なかった事に。

「まぁ特に予定ないから別にいいけどな」

「良いなら良いってもっと簡潔に言えないかなー智之は。いちいち回りくどいんだから」

「そんな事言っていいのか？予定入れるぞ？」

「またまたー。智之を誘う奇特な奴が俺の他にいるわけ無いだろ？」

事実だが幸宏に言われると癇に障る。目立つ髪色をした頭を掴み力を入れた。

「いだだだだだ！ギブッギブッ！」

幸宏にそんな事をして遊んでいると。

「みんなおはよーう」

黒板側のドアから元気よく女子が入ってきた。その声に教室のあちらこちらから返事が生まれた。

「おはよー」
「おはよう夕紀」
「おはよう大西さん」
「今日も可愛いねー夕紀は」

そんな中でも俺はあまり注目せずに最低限の挨拶をして幸宏と騒いでいた。

「おはよう大西」
「大西さんおっはよー」
「二人もおはよーう」

あまり交流のないはずの俺等二人にもちゃんと返事をしてくれる。そんな所がクラスの人気者になる秘訣なのかもしれない。現に幸宏はずっと大西を見ている。

「挨拶返してもらったぐらいで惚れたのか？」

そう茶化してみても反応がない。
「おい、幸宏？」
「…あ、ああ悪いぼーっとしてた」
本当にどこか気が抜けていたのか、苦笑いを浮かべた後、頭をぶんぶんと振り始めた。
「本当に平気か？」
「大丈夫大丈夫。んじゃまた後でな」
そう言って、幸宏が自分の席に帰って行くと同時に、担任が教室に入ってきた。

午前の授業も終わり、昼もいつも通りに幸宏と購買で済ませた。
「毎回思うけど購買のカツサンドを手に入れてるお前が不思議でならないよ」
「俺は毎朝おばちゃんに予約してるんだよ」
「予約とか何だよそれ！ずるっ！」
別にずるくはない。ただ単に去年毎朝おばちゃんの所に通って交渉していただけだ。
「努力したまえ愚民」
「そんなズルして手に入れたカツサンドより、自力で手に入れたカツサンドのほうが美味いに決まってら！」

そんな会話をしながら幸宏と二人教室を出た。午後一番の授業が体育なのでグラウンドへ向かうためだ。
男子はグラウンドでサッカー、女子は体育館でバレーになっている。
基本的に先生はグラウンドに待機し、男子を監視しているのだが。

「さて、今日も適当にサッカー部を潰しますか」

そう言いながら幸宏は準備運動を始めた。普通、部活をやっている人間と一般の生徒では、部活をやっている人間のほうが上手いのだが、うちのクラスは例外だった。
うちのサッカー部は割りと強豪で過去に県大会出場など実績を残している。その為、敷居は高く、ただ純粋にサッカーが好きな生徒や、サッカー部に入部したは良いがついて行けなかった人間も多い。
うちのクラスにはそんな人間が集まっていた。
体育はニクラス合同なのだが、奇しくも隣のクラスはサッカー部が多く、自分達の実力を試す絶好の機会なのだ。
サッカーでの戦績はほぼ五分五分。多少負け越すこともあるが、勝てないわけではない。

「今日こそ勝ち越すぜ？」

そう言いながらサッカーボールを思いっきりこちらに蹴ってきた。

「おいおい、今からそんなに張り切ってるとバテるぞ」

そう言いながら俺も左足で強めのグラウンダーを返す。

「今日はどうだろうな」

そんな事を思いながら、先生がかける号令に従った。

「智之！センタリング！」

幸宏の声に反応してファーサイドにセンタリングを上げる。

「っしゃナイス！」

幸宏は俺が上げたセンタリングにドンピシャでボレーシュートを決めた。丁寧にワンバウンド付きで。

ハイタッチをしながらセンターラインに戻り始めると周囲の男子が少し顔を引き締めた。

何事かと思うと幸宏が近付いて来て。

「アレだよアレ」

そう言いながら、控えめに斜め上を指差した。そこには二階に作られた体育館があり、その周囲に設けられた通路に女子が何組か出てきていた。きっとバレーの試合をしていない休憩中のグループだろう。

「少しでも女子に良いとこ見せないとな」

「あんまりはしゃぐなよ？みっともない」

女子に見られているなら、相手も今以上にやる気を出してくるだろう。今の点数で一点リードしたが、油断は出来なくなった。

ふと、どんな暇人が居るのか気になり、女子が居る方に目を向けると、そこには大西や木村の姿があった。

「っ！」

そして、なぜか目が合ってしまった。向こうも気が付いたのだろう、ガッツポーズを向けてきた。

（頑張れ。ってところか）

思いがけない大西の応援に、心臓が高鳴った。

視線を戻しながらもう一度周囲を見る。俺も今こいつらみたいな顔しているのか。そんな事を思い、恥ずかしさが生まれた。

「号令！」

前に立った先生の合図で授業が終わった。

結果は三対二で我がクラスの勝利。そんな中、俺は二点に絡む働きを見せた。

着替えが終わり教室でクラスメイトに肩を叩かれたり、声を掛けられていると、数人の女子が声を掛けてきた。

「ナイスゲームだったね」

「サッカー部に勝ったなんてすごいね」

「よくやった男子」

口々にさっきの試合の感想を言ってくる。男子は終始照れ笑いをして、顔が情けないことになっていた。滅多に誉められることが無いせいでデレられると弱いんだな。勝手にそう結論付けるていると。

「それなら藤田だぜ？」

なんの話題になったのか俺の名前が出てきた。

「ほら、左サイドに居たのって藤田だよな？」

「ああ」

何の事かと思えばポジションの話だった。左で蹴れる人数が少ない為、自然と左サイドに置かれていただけなのだが、女子からすれば左で蹴れることが尚更珍しかったようだ。

「藤田君って運動出来たんだね」

「藤田は割りと足速いし、良い球上げてくれるよ」

遠慮のない評価に苦笑いをしているとフォローが入った。

「智之はサッカーだけ得意なんだよ。サッカーだけ」

幸宏が言っている事は事実で、他の球技はあまり得意ではない。特にバスケットボールなどは苦手な部類だ。よく突き指もする。

「幸宏も一点決めたし十分活躍してるだろ」

フォローに感謝したわけじゃないが、一応幸宏の名前も出してやる。

「でも藤田くんは見た目とのギャップが凄かったね」

そう言ったのは女子の中でも少し背の低い、栗色の髪を腰まで伸ばした女子だった。

「大西…」
「はい、大西です！」
俺が思わず零した言葉を聞き取り、律儀に返事をするので周りは笑っていた。
「夕紀、あんた割と酷い事言ったって自覚ある??」
大西の横からスッと出てきたのは木村だ。
「酷い事??」
首を傾け横に現れた木村に顔を向けている。何人かは木村の言った意味が分かっているのか、俺に同情の目を向けてくる。
「夕紀は今藤田が見た目暗そうで、全く運動が出来ないオタクっぽいって言ったのよ」
きっとみんなが思っただろう。“誰もそこまで言ってない”と。
そして木村の顔は悪魔だったと。
「そんな事思ってないからね？ね??」
しかし、大西はそれに気付かず大慌てで弁解してきた。
「ああ、別に気にしてない」
「本当に？全然そんな事思ってないからね??」
「分かったから落ち着け」

俺がそう言うと周囲は俺を冷めた目で見てきた。

「なんだよ」

「いやー？別に誰もお前が冷めてるなーなんて思ってないぜー？」

「そうそう、別に冷たいやつだなーとか、やっぱ暗いなーなんてなー？」

そう言いながら男子が散っていった。俺は誰に文句を言えば良いのか分からないので、取り敢えず幸宏は確保し、その場を離れようとした。

「本当に怒ってない？」

そういう大西に俺は幸宏の頭を掴みながら。

「大西には何も問題はない。木村、あんまり大西で遊ぶなよ？見てて可哀想になる」

そう言って今度こそ、その場を離れた。

◇

そんな三度目のファーストコンタクトから数日後、学内合唱コンクールのパートリーダー決めの日がやってきた。

「分かったわよ！あたしもやるからそんな目で見ないで！」

例の如く大西が立候補をし、木村を道連れにしていた。が、たっ

た今木村が大西の泣き落としに屈した所だ。

「それじゃああとは男子だけれども。誰か立候補はいないか？女子に負けているぞ」

どこに勝ち負けを持ってきているんだ。と心の中で突っ込みを入れるが、俺は手を挙げない。

（今回はなるべく自分からは動かずに、流れに任せる）

先日のように、予期せぬ偶然にでもない限り俺は動かないことにしていた。

これは前回のような急激な変化を抑え、大西の周囲に極力影響を与えないようにだ。

そうこう考えている内に男子の立候補者が出たようだ。前回同様、一人目は玉置和也。パーマのかかった髪型で顔は優しげ、印象は悪くない男だ。だが、裏の顔を知っている俺からすればその笑顔もひどく作り物めいた印象を受ける。

そして、玉置が立候補するとほぼ同時に幸宏も立候補した。

「俺やります。やらせて下さい！」

普段から騒がしいことが大好きな、この似非優男は、何故か真面目な顔で立候補していた。

「じゃあ、パート的に僕がバスやるから、そっちはテノールよろしくね？」

「言われるまでもないね」

そう言って幸宏は何故か俺を見てきた。

「幸宏？」
「智之、手伝ってくれるよな？」
「は？」

俺は何を言われているのか分からなかったが。

「一人だとちょっと不安なんで、智之をサブリーダーってことにしていいですか！？」
「はっ！？」

木村に続き、俺も奇声をあげてしまった。斜め後ろから手が伸びてきて肩を叩かれた。

「ドンマイ」

木村がいい笑顔を浮かべながら、叩いた手とは反対側の手で親指を上げてきた。

「…馬鹿な」

第一話　三度目の悪戯（後書き）

自分が動かなくても周囲は動くわけで

第二話　三度目の達成

パートリーダーが選ばれてから数日経ったが、俺は特にすることがなかった。

パート練習の時に指揮をやらされたり、放課後たまに残って話を聞くだけの日々だ。

「なんで俺をサブリーダーなんかに指名したんだ？」

「ほら、俺ってこういう事するの初めてだし、ちょっと不安だったんだよ」

幸宏は頬を掻きながらそう言って横を向いた。それなら一体なんで立候補なんてしたのだろうか。

「なぁ、ならなんでお前」

「あ、悪いこれからちょっと話し合いあるから。また明日な」

「ああ、頑張れよ」

幸宏は、教室の前で集まっている大西達の所へ足早に向かった。

「さて、俺は帰るか」

何かに取り残された気分を感じながら俺は教室を出た。楽しそうに話す幸宏や大西を横目に見ながら、そろそろ髪でも切るかなどとすでに別のことを考えてた。

◇

「おはよう」

いつもより少し遅めに学校に着いた俺は、教室のドア付近に居た大西達に挨拶をした。

「おはよー…？」

「おはよ」

初めからこっちを向いていた木村は、余り反応が無かったが、振り向いた大西は驚いた様子だった。

「どうした？」

「えっと、藤田くんだよね？」

「ああ」

毎度のことながら、髪型ぐらいでそこまで印象が急変するだろうか。驚いてくれるのは嬉しい半面少し複雑だ。

「あんたって実は腹黒いでしょ。凄いギャップよ、それ」

木村は嫌そうな顔を浮かべながら俺の顔を指差した。

「ギャップ？」

「今までオタクっぽくて根暗そうな奴が、急に髪型変えてきて、それなりの美男子になるって卑怯じゃない？」

言っていて恥ずかしくなったのか、木村は少し顔を朱くしていた。これは新しい反応だ。

「うんうん。藤田くん今まで損してたよ！絶対！」
「あんたどれぐらい髪切ってなかったのよ」
「二年入る前に切ったっきりだから半年？」

木村は盛大に溜息を吐きながら頭を抱えた。近くに居る大西も軽く苦笑いを浮かべていた。

「これからはきちんと身だしなみに気を付けなさい？勿体無いわよ」
「藤田くん折角カッコ良くなったんだから頑張ってね！」

そう言いながら二人は自分の席に戻っていった。

「おうおうおう。良いねぇ我がクラスが誇る美人二人に誉められちゃって～」

まだ、教室のドアに立っていた俺の後ろから、気持ちの悪い声がした。まぁ幸宏だが。

「お前だって印象は悪く無いだろ」

背中にのしかかってくる幸宏を、軽くスルーしながら俺も自分の席へ向かう。

「俺のとお前のとじゃ、全然意味が違うんだよ…」

やけに落ち着いた声でそう言われ、何か違和感を覚え振り返ったが、その時にはもう幸宏は自分の席へ向かっていた。

◇

いつもなら放課後はすぐに帰るクラスメイトも、今日はほとんどが残っていた。

「それじゃあここからビニールテープと飾りの布取って行ってねー。はいコレとコレねー」

大西が教壇の上から次々とクラスメイトに材料を渡していく。今日こうしてみんなで集まっているのは、合唱コンの衣装を作るためだ。

材料を受け取った順に自分の席や、友達の席へ行き各々飾り付けを開始していった。

「はい、藤田くんも」

「ああ、サンキュ」

俺も材料を受け取り席に戻ろうとした。

「あ、待って」

「後でお願いがあるんだけど…いいかな？」

「ああ、構わない」

大西が教壇の上からやや上目遣いに聞いてくる。狙ってやっているなら相当な悪女だが、天然だからさらに質が悪い。内心を悟られないように足早に自分の席へ戻る。

飾り付けが進み、初めは集中していて静かだった教室も、作業が

終わった人間が出始めた頃からやや騒がしくなってきた。

「藤田くんちょっと良い？」
「ああ、さっきのお願いってやつ？」
「うん。コレ私の衣装なんだけど」

そう言って差し出してきたYシャツには所々ビニールテープで縁取られ、背中には飾り布が貼りつけてあり、さらに無地の所には色々な絵やメッセージが書かれていた。

「藤田くんも何か書いてくれないかな？」
「なんでも良いか？」
「うん。あ、でも出来れば可愛い感じのが良いな～」
「了解」

教室の雰囲気が楽しいのかニコニコしている大西を横に、俺はすでに書くことを決めていた。

「“ワライダケ”」
「ワライダケ？なーにそれ？？」
「大西っていつも笑ってるから思いついた」

俺が書いた文字を広げながら顔を膨らませ抗議してくるが、何かがツボに入ったのか笑い出した。

「変なのー。そんな事言われたの初めてだよ」
「そうか？よく笑ってる印象があったんだが」
「藤田くんって面白いね」

それに

「それに、もう一個意味あるがある」
「変な意味だったら怒るよー？」
「別に変な意味を付けたくて書いたわけじゃないぞ」
「なんか意地悪っぽいからなぁ藤田くん。それでもう一つの意味って？」
「大西が居ると周りに笑顔が広がるって意味だよ」
「えーなんか恥ずかしい事言われた気がする」

大西は身体をくねらせ恥ずかしさを表現していた。それを見ながら俺は、

「まぁ気障だな」

そう言い二人で笑い出した。俺はその笑顔を見て、やっぱり大西の笑顔は周りを明るくすると実感した。

◇

「じゃあ男子はここに二列で並んで。手前がテノールで奥がバス。奥の方は少し曲線になる感じで。そうそうそんな感じ」
「女子も同じく並んでーこっち側がアルト、向こうにソプラノねー」

合唱コンも遂に明後日に迫った今日。俺達は体育館のステージで模擬練習をしていた。

各クラス数時間しか使えないのでみんなの集中力も高くなっている。

「それじゃあピアノ準備ＯＫ？始めるから指揮者に集中！」

木村の掛け声で皆一斉に息を呑む。

指揮者が手を上げ、皆が集中する中いよいよ模擬練習が始まった。

「――――」

最後の通し練習が今終わった。数回の通し練習で、ステージの雰囲気や声の通り方が分かり、今終わった練習でかなり手応えが掴めた。

「…それじゃあそろそろ時間だから教室に帰ってから反省点話し合いましょう」

個々に歌い終わった余韻を残しながら、ステージから降りていく。

「藤田くんお疲れ様―」

「ああ、大西もお疲れさん」

ステージを降り、体育館の入口で上履きに履き替えていると横から大西が声を掛けてきた。

「テノール凄いねー。なんかテノールだけ纏まり方が違うと言うか何と言うか。う～ん」

「ああ、それなら藤田が引っ張ってるからじゃないか？」

俺の前に居た男子が俺と大西の声に反応した。

「藤田くんが？でもパートリーダーは鈴田くんだよね？」
「リーダーは幸宏だけど歌ってる最中と言うか、歌で実際に引っ張ってるのは藤田だと思うんだよね」

そう言って上履きに履き替えたクラスメイトは、先に教室へ帰っていった。

「藤田くんって凄いんだね」
「いや、ただ単にこの曲を歌った回数が他の人より多いだけだな」

何度も繰り返しているおかげで、合唱の練習している経験も他のクラスメイトよりも何倍も多いし、耳にする回数も勿論多い。そんな影響がここで出てきたようだ。

「でも、あんな風に言われるってことは上手いんだね」
「自分じゃよく分からないけどな」

そんな会話をしながらも上履きに履き替え、俺達も教室へ急いだ。

◇

―学内合唱コンクール―

そう書かれた垂れ幕が、体育館のステージに掛かっている。今日はいよいよ合唱コンの本番だ。何度やってもやはり本番の空気は重苦しく、慣れることは出来そうに無かった。

「よお智之。なんだお前緊張してんのか？」

幸宏はいつもと変わらず飄々としていた。こいつに緊張は似合わないから緊張して大人しくされても困るのだが。

「お前は余裕だな」

「いやだって楽しみだろ。なんて言ったって優勝候補なんだし？」

先日の模擬練習での評価が割と高く、いつの間にやら優勝候補、などと言われているようだった。

「あんまりハードル上げて本番で失敗してもしょうがないだろ。いつも通りでいいんだよ」

そのいつも通りが緊張で出せそうに無いのが俺なんだが。それは横に置いておく。

「鈴田くん、テノールの調子はどう？」

幸宏とグダグダ話していたら、木村と話していた大西がこちらにやってきた。

「ああ、大西さん。まぁ大丈夫だよこっちは」

「女子もやる気充分だよ！優勝目指して頑張ろう！」

体の前で両手を握り、上下にブンブンと振っている。やや興奮しているのか徐々にスピードが上がっていく。

「落ち着け大西。歌う前に疲れる気か」

「無理よ。夕紀はこういう行事が大好きだから、止めてもすぐにまた興奮し始めるわ」

大西の行動に気が付いたのか、女子の集団で話していた木村がこちらに来ていた。

「なら止め続ければいいだろ」

「そんなに言うなら、あんたが止めてみなさいよ。あたしはもう諦めたわ」

「ふ、二人ともなんか言ってることが酷いよ！？」

そう言いながらも腕はブンブンと止まらない。俺と幸宏と木村は目配せをしながら誰が止めるか審議した。

（幸宏お前止めてみろ）

（無茶言うなよ！）

（言いだしっぺのあんたが、止めて見せなさいよ）

（そもそも幼なじみが諦めるなよ）

（お祭りの度にああなるんだから諦めもするわよ！）

審議は続くが中々結論が出ない。仕方ないので俺が少々強引に落ち着かせる事にした。

「落ち着け大西」

「ふぇ？？」

そう言いながら俺はブンブンと上下に振られている手を上から包むように握り、反対の手で頭を撫でた。頭を撫でるのは、昔の癖のようなものだった。

「…」

「…」

幸宏と木村は、無言で俺と大西の動きを見つめていた。握っていた手に、上下に動かす大西の抵抗が伝わってこなくなったので、ゆっくりと放す。頭を撫でる手は依然動かしたままだ。

「落ち着いたか？」

「う、うん」

少し懐かしく、名残り惜しかったが撫でている手を止め、頭から離す。ことの推移を見守っていた木村は漸く頭が回り始めたのか

「こらっ！女の子の頭を軽々しく撫でるな！」

「落ち着いたんだから文句は無いだろ？」

「ぐうううぅぅぅ」

自分が言ったことを思い出したのか反論出来ずに唸る木村。見ていて面白いがあまり怒らせるのも後が怖い。

「悪いな大西。急に頭を撫でたりして」

「ううん。別にいいよ？気にしてない」

大西はそう応えながらも、撫でられた頭が気になるのか、ペタペタとしきりに頭を触っている。

そうこうしている内に俺達のクラスが歌う番が近付いて来た。

「さて、良い感じに緊張も紛れた事だし、いい結果を出すぞ」

そう言いながら俺はステージ横へ向かった。

それに続くように幸宏達も、ステージ横の待機スペースへ向かった。

幕の降りているステージに立ち、本番が始まるのを今か今かと待っている。さっき少し紛れた緊張がまた出てきていた。
何度も経験しているはずの合唱コンでの発表。それでも毎回緊張している。根が臆病だってことの表れなのかもしれない。

いよいよ幕が上がる。
徐々に視界が広がる中で俺はふと、大西はどんな表情をしているのか気になった。

「っ！」

大西と目が合ってしまった。向こうもこちらを見ていたようだ。
俺は軽く、大西に向かって頷くと前を向いた。
さっきまでの緊張は、もうどこにも感じなかった。

「――――」

歌が始まってから数秒で手応えを感じた。この調子なら優勝狙える。俺の横にいる幸宏もそう感じているのか、声が良く伸び、通っている。しかし

「――…――」

幸宏の声が途切れ途切れになって来た。今まで引っ張ってきた声が、小さくなっていったせいで、全体的に迷うような歌声になって来てしまった。

「――」

俺は少しずつ声に力を込めた。急な変化をつけるのではなく、緩やかに、抑揚をつけるように声を大きくしていった。

「――――――」

引っ張る声が現れたことで、迷い気味だった声も力を取り戻し歌が纏まりをみせる。

男子の声に後押しをされるように、女子の旋律も盛り上がりを見せ、さらに歌に力を与える。

「――――――――――!」

歌は終わりに向かって加速する。盛り上がりは最高潮に達し、歌っている俺達の声もさらに力を増す。指揮者の顔も笑顔になり、俺達も自然と楽しさが顔に出てくる。いつまでもこの瞬間が続いて欲しい。そんな気分にさせてくれる一体感だ。

しかしそれも終わりを迎える。俺達は最後の歌詞を発し、指揮者が挙げている手を軽く握るのを見守った。

声が止まる。

俺は息を飲み、歌い終わった後の余韻に身を任せる。ステージ上にはまだ音が反響しており、耳には少しの静寂と伴奏の残響が存在していた。

拍手が起きた。最初はこちらから見て前の列、一年生のクラスから、徐々に体育館全体に拍手が響いた。

「なんか凄かったな」

俺達は自分達の席に戻り口々に感想を言い合っていた。まあ俺は聞いているだけだったが。

「合唱コンでこんなに達成感出たの初めてかも」

「だよなー。なんか俺、終わった後ちょっと震えたし」

パートリーダーでもある幸宏と木村はまだ興奮から醒めやらぬように話をしている。

「まだ他のクラスが発表するんだから、少し落ち着いて静かにしてろ」

いくら良い発表が出来ても、観客として態度が悪かったら余計な問題が起きるかもしれない。それを案じて注意したのだが。

「やだやだ、あんたって本当に冷めてるわね。もっとこう他に言うことないわけ？」

「智之〜。今のは空気読めてなかったぞ〜？」

全く意味がなかった。周りの目に気がつけば寧ろ空気が読めてないのは五月蝿くしているこの二人なのだが。

「そうか、なら好きにしろ。注意されても俺は知らないからな」

そう言って俺は、椅子に浅く座り背もたれに身体を倒し、姿勢を低くした。

「藤田くんて大人だね」

周りから目立たないように体勢を低くしていた俺に後ろから声が掛かった。

「周りのクラス、ちょっといい顔してないもんね」

どうやら大西は周りのクラスから飛んでくる冷ややかな目に気が付いたようだった。余程俺達の発表が上手くいっていたのか、初めのうちは素直に好意的な視線だったものが、興奮冷めやらぬといった様子で騒いでいたせいで、徐々に冷ややかな目で見られるようになっていた。

「まぁな。人の視線には前から敏感でね」

「そうなんだ。私もそういうのわかる方だったはずなんだけど、藤田くんが言わなきゃ気が付かなかったよ」

大西は周りの雰囲気に気が付かなかったことを、少し落ち込んでいるようだった。

「あれだけの発表を出来たんだし、興奮して周りが見えなくなるのは仕方ない」

「でも藤田くんは落ち着いてるよ？」

「俺は…」

なんて言ったらいいか浮かばなかった。こういう経験を何度もしているから。主観じゃもう何歳も年上だから。どれも言えない事だった。こうして考えてみると俺は大西に対して嘘の自分で接しているんじゃないか？そう考えてしまった。慌ててその考えを振り払う。それは考えても仕方のないことだ。何が原因かは分からないが二度もこうして人生をやり直している事は違いない。割り切らなければ

先に進めなくなる。

「藤田くん？」

急に黙った俺を心配したのか、大西は後ろから身体を前の席に乗り出して来ていた。

「何でもない。俺はただ…」

「ただ、臆病なだけだ」

“それでは最後に、最優秀賞を発表します”

木村や幸宏、他数名が担任に説教を食らってから数十分後、全てのクラスが発表を終えていた。

学年別の優秀賞はすでに決まり、残す所全学年合わせた中の最優秀賞のみだった。

すでに学年優秀賞はうちのクラスが取っていた。狙うのは優勝。すなわち最優秀賞だ。

クラス全員が固唾を飲んで発表を待っていた。手応えは十分あった。練習以上のものを出せたと思う。今までの経験からも最高の出来だった。しかし

“最優秀賞は”

“二年三組”

しかし、選ばれると予想していてもこの嬉しさは想像以上だったらしい。

気が付けば俺は自然と小さなガッツポーズとしていた。

第二話　三度目の達成（後書き）

積み重ねはいつか芽吹く

気がする

第三話　三度目の立ち位置

合唱コンの翌日俺は大西に呼び出されていた。見覚えのある、夕暮れの教室に俺は居た。

「残ってもらってごめんね？藤田くん」
「いや別にいいさ。急ぐ用事もないし」

教室の窓際、最後列に近い俺の席。俺と大西はそこで向かい合っている。近い内に席替えがある為この席とももうそろそろお別れだ。

「それで頼みごとってなんだ？」
「わざわざ人が居なくなる時間に教室で、ってことはあまり人には聞かせられない話なんだろ？」

今の時間はもう授業が終わって、皆が帰宅を始めてから随分経つ頃だった。時計は午後五時に差し掛かろう、といった具合だ。夕暮れがそろそろ青黒く変わり、夜の気配が見え隠れしてくるような景色。

「実はね？相談に乗って欲しいの」
「相談？」
「私、彼氏が居るんだけどね？その彼氏の元カノとちょっと…」
「何かされているのか？」

元カノと何かがあったのは知っていた。昔もそれとなく相談に乗ったり、拙いながらもアドバイスをしたことがある。今回ほどはっきりと相談に乗って欲しいと持ちかけられたことは無かったが。

「元カノさんも彼氏も先輩なんだけど…私のせいで別れたみたいでね？」
「先輩の友達とかにもあんまりよく思われてないんだ私」
そう言いながら辛そうに視線を落として行く。そんな大西をこれ以上見ているのは耐えられず。
「俺で良ければ相談ぐらいは乗るが」
「ホント？藤田くんなら大人な意見が聞けるんじゃないかって思って！」
「ほら、合唱コンの時とか落ち着いてて、なんだか大人な人だなぁって感じたの」
俺が引き受けたことに安心したのか口数も多くなって来た。
「今までは鈴田くんが居る時にしかあまり話したことって無かったけど、これからはもっと声掛けてもいい？」
今まではパートリーダーとして仲良くなった幸宏が、間に居たから話をする機会があったが、合唱コンが終わったのでこれからはそんな機会も無い。その事を考えての呼び出しだったわけだ。
「ああ、構わないよ。まぁ普段は幸宏と居ることが多いだろうけどな」
なんだかんだ言って、普段から一緒に行動することが多いので自然とそうなるだろう。
「あ、そうか二人とも親友だもんね！なんだか私空回りしちゃった」

「ただの友人だけどな」
「またまた照れちゃってー」

そうやって巫山戯合いながら、俺は大西の相談事について考えていた。

（彼氏の元カノか…）

以前はここまで深い事情を知らず、ただ落ち込んでいた大西に精神的な励ましをしていたが、今回は事情が違う。また前回みたいに俺の知っている流れと変わってきている。今はいい流れだが、いつ俺の行動が悪い方向に流れるか予想が出来ない。慎重に動く事が必要だ。

「とりあえず今日はもう遅いから、そろそろ帰ろっか」

そう言いながら、俺の机に置いた鞄を肩にかけ俺を促す。俺は一度窓からテニスコートに目をやり、一度手を振って自分の席から離れた。

「お友達？」
「俺の親友兼幼なじみだよ」

そう言いながら教室を後にする。

学校を出ると辺りは薄暗くなっていて、少し肌寒さを感じた。季節は秋になっていて、今月末にはもう文化祭の準備期間に入る。

「バスすぐ来るね」
「いい時間に学校出れたな」
そう言いながら俺は歩道の縁石に腰掛けた。いくらすぐ来ると言っても立って待っているのも怠い。座りながらバスが来る方向を眺めていると
「あ」
大西が学校の方向を見ながら、そう声を漏らした。
「どうした？」
その声に、俺は大西の視線の先を追いながらそう声を掛けた。視線の先には一人の男子生徒が居た。
「佑樹くん…」
「夕紀？どうしたんだいこんな時間まで。部活は休んだんじゃなかったのかい？」
「ちょっと友達に相談をしてて…」
そう言いながら俺に視線を流す。俺は特に気にした様子もなく返事をした。
「どうも」
やや探るような目を向けられたが、動揺を見せない俺に何かを感じたのか、温和な顔に戻っていった。

「相談？僕にしてくれても良かったのに。勉強のことなら教えてあげられるしね」
「ううん。勉強のことじゃなくて、ちょっと…」

まさか相談事に関わる本人に言えるはずがなく、言葉を濁すしかない大西。ここは少し助け舟を出しても悪くはないだろう。

「クラスの事で色々ありまして。先輩に相談する程のことでも無いんですよ」
「そうだったのか。夕紀、御免よ？力になれなくて」
「いいの。ありがと佑樹くん」

俺が話しに割って入ったことに嫌な顔一つせず笑顔で対応してくる先輩。本当に嫌になるぐらい出来た先輩だ。

「で、君の名前は？夕紀の相談に乗ってくれる後輩の名前ぐらい覚えておきたいんだけれど」
「藤田です。藤田智之、大西さんと同じクラスに居ます」
「藤田君か。これからも夕紀と仲良くしてあげてね。女友達は多いみたいなんだけど、男子とはあまり話せないみたいなんだ」
「はい分かりました」
「酷いよ佑樹くん！私が友達少ないみたいじゃないー！」

先輩は、少し切れ長の目を優しげに曲げながら笑顔で俺に向け、大西には少し意地悪な顔を見せる。
身長も俺より頭一つ分ほど高く、勉強も出来て、運動神経も悪くない、尚且つ優しく彼女思い。こんな先輩の唯一の欠点がモテ過ぎることだと誰も思うまい。

「って、藤田くんもさり気なく同意してるし！」

大西が俺のちょっとした意地悪に気が付いた所でバスも到着した。
俺は二人とは少し離れた位置に座り、一人で考え事をしていた。
「元カノか…」
今は情報が少ないからなんとも言えないけど、元カノがまだ先輩に未練があるとかそう言った話だろう。ただ、先輩の周囲も大西を良い顔で見ていないというのは、よく分からないが。
離れた位置から聴こえる二人分の話し声をＢＧＭに、俺は眼を閉じた。

◇

次の日から俺は、毎日放課後の教室で大西の相談に乗っていた。
「元カノさんが言うには、まだ別れていないって話でね？」
大西の相談事は元カノに嫌がらせを受けていると言う話だった。同じバドミントン部の先輩で、男子バドミントンに居る彼氏先輩とは本当に仲睦まじい様子だったらしい。しかし去年大西が入部し、さらに彼氏先輩が部長になってから二人は別れたらしい。らしいと言うのは彼氏先輩は別れたと言っていたのだが、周囲はそうは思っていなかったという事だった。大西が入部して彼氏先輩が一目惚れしたのか、それとも部長になったことで部活に集中する為になのか

俺には理由が分からないが、別れを言い渡された元カノは、大西に良い気持ちは持たなかったのだろう。

「それで大西に嫌がらせか」

元カノも表向きはいい先輩らしいのだが、裏では大西に色々しているようだった。

「一度だけ佑樹くんにそれとなく言ってみたんだけど…」

その時のことを思い出したのか少し気落ちしたような雰囲気が伺える。なんとなく先輩の性格から予想はついた。

「元カノはそういう子じゃない、何かの間違いじゃないか…」

「え？」

俺がなぜ分かったのかといった雰囲気で勢い良く顔を上げる。お互い座っていてもそれなりに身長差がある為、そんなに勢い良く顔を上げて首を痛めないか心配だ。

「なんとなく想像が付く」

「そっかー…」

「表向きが良いなら尚更信じないだろうな。特に先輩みたいに誰にでも優しい人は」

そんな先輩に憎悪を向けられた俺は特殊過ぎるケースだな、と心の中で苦笑いをする。

「そうなのかな…」

「それでどうしたいんだ？」

「実はその…どうしたらいいのかな、ってのが相談したいことなんだけど…」

どうしたらいいか、か。正直こういう場合は彼氏が動くのが一番な気がするんだが、それは望めず。次の案として考えるなら…

「いちいち反応をしないで、堂々と先輩の彼女していればいいんじゃないか？」

以前の経験から推測すると、俺が励まして上手く行ったのなら、大西は嫌がらせに屈しないで頑張ったのだろう。

「堂々と？」

「そう。堂々と」

「何かあったら彼氏に相談。彼氏に相談出来ないなら、木村でも俺でも話を聞いてくれそうな奴に愚痴る」

「理恵は…」

「木村はダメなのか？」

そう言えば、何故木村に相談をしなかったのだろうか。すると大西は目を逸らしながら

「理恵はほら、過激だから…」

「理解した」

コンマ何秒で理解できた。あいつに任せたら、即殴りこみをしに行きそうだ。なるほど、あまり大事にしたくないから、俺にお鉢が回ってきたわけだ。

「なら俺が愚痴でも泣き言でも聞いてやるよ」

「ありがとう…」
「その代わりに」
「私に何か出来ることある？」
「コーヒー奢ってくれ。勿論ブラックで」

何を頼まれるか緊張していた大西がポカンと呆気に取られている。
そうだ、俺がブラックのコーヒーを飲むようになったのは、大西と教室に残っている時によく奢ってもらったからだ。見栄を張って、格好を付けたくてブラックと言ってしまって、それからの習慣だった。
漸く復帰した大西は何故かニッコリと笑っていた。
「ブラック飲めるなんて、やっぱり藤田くんは大人だねー」
そんな皮肉っぽい台詞を残して大西は教室を勢い良く出ていった。
「買ってくるからちょっと待っててねーーーー！」
廊下から聴こえるそんな声に、俺は自然と声を出して笑っていた。

第三話　三度目の立ち位置（後書き）

苦いことは良いことだと思う

女の子は甘いもので出来てるけれども

第四話　三度目の予兆

秋の雰囲気も色濃くなり、風が涼しく過ごしやすくなってきた頃。遂に文化祭の準備期間がやってきた。放課後の相談教室は依然続いているが、最近は愚痴や泣き言よりも世間話や友達の話、先輩の事などを大西が楽しそうに話しているのを聞く事が多い。

クラスの皆も自然と放課後は残らず、足早に居なくなるようになり、暗黙の何かが出回っているようだった。

勿論木村は文句を言ってきたり、幸宏は少し寂しそうにしていたが、大西が頼み込んで納得させていた。幸宏はそんなに俺と遊びたいのかと、若干ホモ疑惑を抱いたぐらいに食い下がったのが印象的だった。

「さて、今回も案の定人形劇になったわけだけど…」

そう言いながら俺は黒板を見ながら軽い絶望をした。黒板にはさっき終わったＬＨＲで決まった文化祭の出し物とそれの役割分担が書かれていた。名前の下には正の字が書かれていて、それぞれ投票や多数決が行われたことが分かる。が、何故か人形劇の主役と書かれている部分に俺の名前がある。そしてさらに何故か俺の所には正の字は無く、全会一致で可決されている。

「寝ている間に何が起きた…」

俺は、このＬＨＲが文化祭の出し物についてだと分かっていたので、軽く居眠りをしていた。

起きてみたら、何故か劇の主役になっていた。何を言っているのか、俺にも分からないがそうなっていた。

「それに」

ヒロイン役には勿論記憶通り大西がなっていた。これも正の字は無く、全会一致だったようだ。

言いたくないが、本当に俺が劇の主役になんかなったら緊張でボロボロになる事間違いなしだ。なんせ合唱コンという、場数を踏んだ舞台でも緊張で手が震えるというのに、劇の主役なんて一度も経験したことがない舞台に放り出されたら…。

「ダメだ、変えてもらおう。それがクラスの為だ」

「ダメだよ？智之くんが主役だから私もヒロイン請けたんだから」

聞きようによっては、誤解されかねない発言をしたのは大西だった。

大西はいつの間にか、俺を名前で呼ぶようになっていた。

「そんな見え透いた嘘を付いても、俺は降りるぞ」

だが俺は嘘だと分かっている。何故なら大西は、俺が主役で無くても、ヒロインを立派にやり遂げると知っているからだ。

「ひっどーーい。智之くんが寝てるからいけないんだからね！」

これが学校行事や、役員選抜に行われる悪しき風習“欠席裁判”か。不覚、今回もどうせ大道具係だろうと余裕を見せたのが運の尽きか。

「ねぇ聞いてるのー？なんだか最近智之くんが意地悪な気がしてきた…」

「知り合ったのも、仲良くなったのもつい最近なはずなんだけど？」
「ほら！やっぱり意地悪だ！」

そんな声に釣られてきたのは悪しき友人、略して悪友だった。

「智之は一見大人しくて何考えてるか読めないけど、実はドが付くほどのSなんだなー」
「人をむっつりな変態みたいに言うな」
「うー…そうだったんだね。少しショック」

本気で数歩下がった大西は放っておいて、余計な事を言った幸宏にアイアンクローをくれてあげる。

「ぐぉぉぉおお！ギブ！ギブ！！」
「あんたら何してんの？」

教室に戻ってきた木村が俺と幸宏を見て呆れた顔でそう言ってきた。心底馬鹿を見るような目で見上げてくる。綺麗に切り揃えられた短めの黒髪が、さらりと流れて少し見惚れる。

「夕紀に馬鹿なこと教えてないでしょうね？」

見上げてきたままに毒を吐く。主観では数年ぶりに聞く、木村の柔らかい毒に少し懐かしさを感じる。

「馬鹿なのは幸宏だけだ」
「二人とも酷い気がする…」

ボソッと大西がフォローするが、俺は気にしない。

「とにかく大西がヒロインなのは分かるが、俺に主役なんて務まらないぞ」

話を元に戻すために結論を言う。とにかく俺は主役から降りたかった。俺が主役になる。それが何か問題を引き寄せそうで怖かった。

「だめぇー。コレは決定事項なの」

「なんか知らないけど、あんたが相手だと安心だって言って聞かないのよ」

本当に何したんだか…。などとブツブツ言いながら木村が俺を睨んでくる。

「俺も立候補したんだけど男子から止められたんだよねー。お前だと俺達が不安だって」

幸宏のクラスでの位置も決まったな。頑張れ弄られ役。

しょんぼりしている幸宏はスルーしてもう一度黒板を見る。大道具の役割分担に幸宏の名前が有り、その横には玉置和也と言う名前が有った。それが俺の嫌な予感を増大させていた。

◇

周囲に逃げ場を塞がれ、渋々主役を承諾した俺は毎日大西や他のクラスメイトと台詞合わせをしていた。

驚いたことに幸宏が大道具の仕事を完璧にこなし、裏方のリーダーになっていたので、当初感じていた不安も薄れていた。

気になった所といえば、幸宏が設計した図面に何処か見覚えがあ

るぐらいだったが、それも演劇部から昔の図面を引っ張ってきたらしい。様子を見に行った時もその破れかけの汚れた図面をヒラヒラと振って指揮していた。

「見たこともない服装だ。貴女は一体何処からきたのですか？」

「ここは一体何処なの…」

今はまだ人形も無いため、椅子に座りながら台詞合わせをしている。演じたことは無かったが、前回しっかりと見ていたお陰か、台詞を覚えるのは楽だった。

「ちょっと休憩にしましょう。ほら飲み物」

全体の指揮をしている木村が演技を止める。少し喉が痛くなってきたので、丁度良いタイミングだった。

「あんた、言う割にはしっかり出来るじゃない。なに、嫌味？」

「休憩中も毒を吐くなんて、余程好かれてるな俺も」

「はぁ？あんたの頭は本当にお気楽ね」

大西とよく話すようになってから、木村とも接する機会が増えた。増えたのは良いが毎度毒を吐いたり、暴言を吐くのは止めて欲しい。まぁただ不器用なだけなんだが、分からない相手にやったら普通は引かれるし嫌われるだろう。もしかしたら、大西から離れるようにわざとか？まぁそんな頭が回るほど器用な子じゃないだろうけど。

「二人ともホント仲が良いねー。妬けちゃうな」

横で渡された飲み物を飲んで一息付いたのかそんな事を言ってきた。そんな事を言えば木村がどんな反応するかぐらい分かるだろう

に。

「は、はぁ！？夕紀熱でもあるの！？それとも智之に毒された？！」

「また随分酷い言われようだな」

俺が笑っていると、大西はこちらをやや見上げる形で睨んできた。睨んできたと言ってもしかめっ面になっているだけだが。

「智之くんは理恵と息が合ってるよね！」

何が気に入らなかったのか、少し不機嫌になっているようだった。

「夕紀？あんた本当にどうした？」

木村も、少し驚いた様子で声を掛けていた。当の本人は眉間に皺を寄せて何やら唸っていた。

「うーーーーー…なんかモヤモヤする」

自分でも理由が分からないのか、一向に唸り声は止まない。こちらを睨む木村に、俺は首を捻って返事をした。

そんな様子を繰り返しながら文化祭の準備は着々と進んでいた。

◇

準備も順調に進み、ある程度の目処が立った頃、俺はあることに

気が付いた。

「なぁ、幸宏。玉置は何してんだ？」

「ああ、あいつなら細かい作業が得意だって言うから、人形作り側に行かせた」

本来玉置が居る筈の教室に姿が見えなくなっていたのだ。そういえば前回、玉置はどこにいた？俺が任されていた舞台造りの教室に居たか？いや、居なかったはずだ。と言うことは前回もあいつは女子に取り入って人形作りの場所にいたのか？あの男子拒絶な状況で。

「まぁ女子の評判も悪くないし、今更戻って来いとも言えなくてさ」

幸宏は、玉置を向こうに送ったことを、何か後悔しているようだった。

「人手が足りないのか？」

「いや、ちょっとね」

玉置一人だけ女子のグループに混ざっていることに男子から何か不満が出ているのだろうか。こいつが言葉を濁らせるような理由は、それぐらいしか思い浮かばなかった。

「まぁ手が足りなかったら俺も手伝うし、何時でも呼べよ」

「稽古が嫌なだけだろそれ」

バレたか、なんて言いながら何かを誤魔化すように二人で笑った。

「これで一応は通しでの台詞合わせも出来たわね。上手くなったかは別だけど」

最後の台詞を、俺に向かって飛ばしてきたが、聞こえなかった振りをする。こんな棘を一々気にしていたら、俺はもう此処には居ないだろう。ただ、木村の言うことは嫌味が無いので、素直な評価としては正当性がある。その辺りは信頼しているが、もう少し柔らかめにお願いしたい所だ。

「俺の上達は気長に待ってくれ」

俺がそう控え目に返事をするとフンッといった感じでそっぽを向く。俺の反応がお気に召さなかったようだ。

「やれやれ」

「何よ、馬鹿にしてるの」

「ほらほら二人とも、仲が良いのは分かったから」

木村が再燃しそうになった所を、周りのクラスメイトが冷やかす。それを聞いた木村は見ていて面白いほどに慌てた。

「は、はぁ！？誰がこんな嫌味でいつも飄々として人を馬鹿にしたような奴を！」

そういう反応が面白くて、皆からかうんだろうよ。俺は我関せず、と決めて大人しくしておく。

「？」

ふと、大西の反応が気になって見てみると、何やら難しい顔をし

て床を見ている。
「何やってんだ？」
いつもなら「酷いよ！」といった具合に会話に参加してくる気がしたのだが、何か悩んでいるようだった。
「また例の事でなんかあったのか？」
例の事と言えば、元カノの事だ。大西が気にしなくなったせいなのか、最近ではあまり嫌がらせの頻度も少なくなってきているようだったが、また何かあったのだろうか。
「智之くん…」
「どうした？」
俺に声を掛けられて漸く、自分がぼーっとしていたことに気が付いたようだった。周りのクラスメイトはまだ木村弄りを続けているようだった。
「理恵ちゃんってば、嫌い嫌いって言う割にはよく見てるじゃない」
「そうそう。最近理恵ってば、口を開けば藤田君の愚痴だもんねー」
「それは！こいつがちっとも上達しないから責任者として…」
何かとんでもない方向に話が行っているが。反応したら思う壺だ。
「大西、今日の放課後空いてるか？」
「あ、うん」
「なら今日も相談乗るぞ？」
「相談…」

そう言って何かに気が付いたのか、大西は誰かを探すように周囲を見た。

「今日はやっぱり止めておく。ごめんね？」

大西は本当に申し訳なさそうに顔を歪めながら謝ってきた。そこまで気にするような事ではないのに。

「大西がまた相談したくなったらちゃんと言えよ？」

「ありがと智之くん」

それで会話は終わり、丁度同じタイミングで木村弄りも終わったようだった。

「はぁ…それじゃあ今日はこれまでにして解散しましょう。夕紀帰ろ」

「あ、理恵先に帰って？私ちょっと寄る所あるから…」

「あたしも付いて行くよ？別に急いで帰らなきゃいけない訳じゃないし」

「いいの、一人で大丈夫だから。それじゃまたね！」

言いながら大西は急いで教室を出ていった。

「フラれたな」

「うるさいわね」

木村を程良くからかいながら、俺も幸宏を探した。

「あれ？幸宏どこ行った？」

「あんたも置いていかれたんじゃないの？」

さっきの仕返しとばかりに、すかさず突っ込みが入る。いくら教室を見回しても幸宏の姿は無く、鞄も無かった。

「なぁ、幸宏何処行ったか知ってるか？」

仕方無く、近くに居たクラスメイトに幸宏の行方を聞いてみる。

「ああ、ユッキーなら材料が足りないって言ってさっき、近くのホームセンターに買い出しに行ったよ？」

なるほど、文化祭準備期間となれば良くある事だった。

「あいつもちゃんとリーダーしてるんだな」

「合唱コンに続いて、文化祭でもリーダーになるんだから、責任感あるんでしょうね。誰かと違って」

横から来る棘は聞こえないことにして、帰り支度をする。

「で、フラれた者同士仲良く帰るか？」

「嫌よ！変な誤解されたらお互い迷惑でしょ！」

「へぇ」

俺の事まで気に掛けてくれたのか。本当に不器用な子だ。それに、どうやら木村には俺の好きな相手がバレているらしい。前回の教訓から、あまり俺からはアプローチしてなかったのだけれども。

「何よその顔。ホントあんたって同い年か疑いたくなるわ」

「どんな顔だよ」

「年下の子が、何か上手くやった時に誉めるような顔よ！頭にくるわ」

そんなおっさん臭い顔をしていたのか俺。まぁ実際年上だし、間違いじゃないな。

「とにかくあんたはムカツクのよ！じゃあね！」

捨て台詞を吐いて木村は走って教室を出ていった行った。そんなに激しく動くとスカートが捲れそうだが、まぁ自業自得って事で。

一人取り残された俺は、そのまま帰るのも手持ち無沙汰なので、人形造りの進み具合を見に行くことにした。一階にある家庭科室、もっと詳しく言えば被服室、そこへ向かう途中俺は三年生の集団とすれ違った。

「聞いたか？バド部の話」

「なんか二年の女子で調子に乗ってるのがいるんだろ？」

「それじゃねえよ。四組の奴が言ってたんだけどよ」

「今度ヤバい写真撮って脅すらしいぜ？」

「それっていつの話？」

「え、それって今日じゃないのか？」

それを聞いた瞬間、俺は頭が冷えていくのを感じた。バド部、二年女子、色々な符号が幾つも頭の中で浮かび上がり、組み合わさっていく。大西のことか！！

今大西は一人なはずだ。何かあっても対処が出来ない。相手は何人なんだ？何処でだ？

こんな事があったなんて俺の記憶には無い。と、言うことは俺のせいか？

思うなり、すぐさま俺は大西の携帯に電話を掛けた。

「頼むから出てくれ…」

トゥルルルル…

呼び出し音が鳴る時間がやたらと長く感じる。

プッ

繋がった。

「はーーーい！こちら大西夕紀ちゃんの携帯電話でーす」

男の声がした。

「誰だ？」

「はい？」

「お前誰だって言ってんだよ！！」

大西が出るはずの電話に巫山戯た調子の男が出た。その事だけで冷えていた頭が沸騰した。

「ちょ、ちょっと落ち着けって」

「落ち着いてられるか！夕紀を出せ！」

「夕紀ってお前。落ち着けって」

「智之」

は？

「俺だよ俺。ユッキーこと幸宏君だっての」

一瞬何を言っているか分からなかった。幸宏が三年とグル？

「ビックリしたな、もう。急に怒鳴り始めるし、大西さんの事名前で呼ぶし」

「お前、大西の携帯持って何してんだ…？」

まず肝心な事を聞く。いつもと変わらない幸宏の声に、少しは落ち着いて来たようだ。

「バス停で会って、なんかお前のことで相談事があるってんで今一緒にホームセンター来てるんだけど。あ、相談事ってのは秘密だった？」

横に大西が居るのか、幸宏は少し離れた位置で会話を始める。

「それで、なんでお前が大西の携帯に出るんだ？」

「え？ちょっとしたお茶目心だよ。乾いた智之の毎日に驚きと潤いをね」

その言葉でどっと力が抜けた。そうだ、そもそもさっきの話だって、大西の事だって確証はない。

「周りに上級生居たり、不審人物は居ないな？」
一応万が一の時の為に警戒を促す。
「上級生と言うか、うちの生徒だらけだなー」
準備期間はどこのクラスもやることは同じってことか。
「とにかく、無事に大西を帰らせろよ？」
「了解了解」
軽い返事に不安になりながら電話を切ろうとする。
「あ、あの智之くん？」
すると、携帯から大西の声がした。いや、大西の携帯電話にかけたのだから、これが当然なんだが。
「なんだ？」
もう一度耳に携帯電話を近付け、落ち着いて返事をする。
「私のこと名前で呼んだってホント？」
「…」
気が動転していて、つい名前で呼んでしまったのは失敗だった。
「いや、幸宏の気のせいだ。幸宏って呼ぼうとしてそれがたまたまそう聞こえたんじゃないか？」

これは苦しかったか？と思ったが、いきなり馴れ馴れしく名前で呼ばれるのも嫌だろう。

「ホント？」

「ああ」

どこか探るような声色で聞いてくるが、俺は嘘を突き通した。

「そっか…残念」

「え？」

「でも、今度からは私のこと夕紀って名前で呼んで？せっかく仲良くなったのに私だけ名前で呼ぶのって不公平だと思ってたの」

まさか、このタイミングでそんな事を言われるとは思わなかった。残念そうな雰囲気から一転、良い事を閃いたかのように嬉々とした大西を、止める事は俺には出来なかった。

「分かった。分かったから気をつけて帰れよ？」

再度、今度は大西にも念を押して幸宏に代わってもらった。俺の考え過ぎなら良いが、何故かまだ不安は拭えなかったから。

「それじゃあ気をつけてな」

そっちもな、と言う幸宏の返事を聞き俺は通話を終えた。

翌日、幸宏に帰り道で数人の男に絡まれたが電車に乗りなんとか逃げ切った、と聞いた時は本当に肝が冷え、幸宏が付いていて良か

ったと心から思った。

第四話　三度目の予兆（後書き）

繰り返す内に見えてくるものもあるようでないような

第五話　三度目の気遣い

文化祭を明日に控えた教室は慌ただしかった。準備は一部を除いてほぼ予定通りに進んでおり、今日の予行練習で最終確認するだけだ。

その準備の中でただ一つ上手く進んでいない準備。それは俺の使う人形。作っているのは玉置だった。

男の俺が使う為、男の玉置が作ったほうが良い、などという良く分からない理屈により、いつの間にか決定していたようだ。

「本番までには間に合わせるからもうちょっと待ってくれないかな、ね？」

今も玉置は教室の隅で椅子に座り、人形を手縫いしている。器用なもんだな、とは思わないではないが、ちゃんと本番までに間に合わせるか不安でもあった。

「主役の人形が本番まで使えないのは不安だけど、代わりの人形で一回最初から通してみましょう」

木村が手を叩いて注目を集めながらそう言った。前髪をピンで止め、やる気満々といった雰囲気だ。

「まだ本番じゃないのに緊張してきたよ～」

観客から演者を隠す、高さ一メートルぐらいの舞台にたどり着いて早々、大西はそう呟いた。

「大西はまだいいだろ。俺はまだまだダメだしされてるってのに」
「と・も・ゆ・き・く・ん」
とてもいい笑顔で俺の名前を呼ぶ。笑顔なのだが何か恐ろしい威圧感を醸し出している。
「悪かった夕紀。まだ慣れないだけだからそんなに怖い顔しないでくれ」
「怖い顔って何！女の子に向かってそれは酷いよ！」
さっきまでの雰囲気とは一転、急に泣きそうな顔で抗議してきた。一瞬見せた満足気な顔も見逃さなかったが。
「絶対わざとだよ…わざと苗字で呼んで私の反応を楽しんでるんだ…」
植物から水分が無くなるようにしおしおと床にへたり込んで行く。演技が上手く行かなかったら智之くんのせいにしよう、などと不吉な事も聞こえてくる。
「ほらそこ！舞台の影でイチャイチャすんな！」
「してません！イチャイチャ！」
木村に大きな声で指摘され、大西は滅茶苦茶な日本語で返事をした。
その後も、俺が台詞を噛んだり、演技を指導されたりとあったが文化祭前日の予行練習は概ね上手く行ったと思う。
こうして、大西との関係も良好なまま三回目の文化祭当日を迎えようとしていた。

◇

文化祭一日目は一般開放はせず、学生同士で他のクラスを回っている。露天の売上などで順位を出したりもするが、うちのクラスは演劇なので順位争いには縁がない。そういう順位争いをしようとするクラスは、一般開放に向けて敵情視察をする日だ。

うちのクラスはと言うと。

「照明の最終チェック終わった？」
「ＢＧＭ用のスピーカー接触悪いぞ」
「舞台の設置補強するからガムテくれ」
「これで人形が全部揃ったわね」

このように着々と準備が整っている。ある程度は前日にチェックしたので、ほぼ軽い確認で済んでいる。

俺が危惧した玉置の悪巧みも特に無く、少し気にしすぎだったのかも、と反省をした。

「なぜ私の側から消えてしまったのだ…」

演劇は午前一回、午後二回の三回行う。午前の幕は目立ったミスもなく、無事に終えることができ、今は午後の一回目だ。

「たとえこの世界の人間では無くても愛していたのに」
「ならば今度は私が異邦人になりましょう」
「何度違う世界に行こうとも、貴女を幸せにするためならどんな困

難も苦悩も乗り越えてみせましょう！」

異世界の王子に自分を重ねると、なんともすんなりと台詞に感情が乗る。

（どんな苦労も厭わない。大西を幸せに出来るなら）

ヒロインの独白シーンに移る。

「私が居ることであの方に害が生まてしまう…」

「だからあの方の側を離れて良かったのよ…これが私の精一杯の愛」

演じる大西は感情移入しているのか、やや眉を寄せ苦しそうな表情をしている。

俺の視線に気が付くと、いつも通りの笑顔を浮かべ、直ぐ様真剣な顔に戻り演技を続けていった。

こうして午後の一番目の幕も滞り無く消化していった。

二幕目までの休憩時間、俺は他のクラスの出店を回っていた。昼と、この時間しか自由時間がない為、今のうちに文化祭ならではの食べ物を物色していた。

「タコ焼きに塩焼きそば、あとはおやつに甘いものでも食えばいっかな」

そう言いながら三年のフロアであるニ階へ向かった。確か二階に丁度、甘味喫茶があったはずだ。

客引き兼客のような人混みを抜けていくと、目の前に甘味喫茶に並ぶ列が二つあった。
片方は席に着いて食べていく人用、もう一つはお持ち帰りの人用だった。俺は勿論お持ち帰り用に並んだ。
やはりこちらの方が回転率が良いようで、もう一つの列をグングン抜いていく。そうすると聞き覚えのある声がした。

「休憩時間に間に合うかなー」
「平気さ。こっちも入れ替えだから進む時は一気に進むよ」

俺が見つけたのは大西と先輩だった。先輩は俺の視線に気が付いたようで軽く目礼をしてきた。軽く挨拶を返すと、今度はそんな先輩の行動に気が付いたのか大西がこちらに振り向いた。

「あ、智之くん」
「よう大西。デートとは羨ましいな」

俺が苗字で呼んだ理由に気が付いたのか、申し訳なさそうに顔を俯かせた。こういう気の遣い方は間違えたかな、そう思ったが先輩としても、彼女が名前で呼び捨てされるのは気になるだろうし仕方がない。

「君には夕紀の事でお世話になったね。良かったらここは奢らせてもらえないかな？大した金額にはならないけれども」

にこやかにそう誘ってくるが、俺は辞退した。

「カップルの邪魔をするほど野暮なやつじゃありませんよ。それにお礼を言われるほどのことは出来てませんし」

この前の件だって幸宏が居たから大事には至らなかっただけの話だ。悩みについても、俺はたいした事をしていない。

「そうか、いずれ何かの形でお礼が出来るといいね」

俺の列が進んだので会話はそれで終わってしまった。俺と先輩が会話している間、ずっと大西は俯いていたのが印象的だった。

午後の二幕目で異変が起きた。

始まる前から少し大西の様子がおかしかったのだが、本番が始まって少し経った辺りで大西がこちらの様子をチラチラと伺って来た。

それのせいで台詞に気持ちが入っていなかたり、声が上手く出ていなかったりとらしくないミスが続いた。

周りのフォローがあり、なんとか劇は終わらせることが出来たが、内容的にはいまいちだったと思われる。

「夕紀、一体どうしたの？」

片付けに入ってすぐ、木村が大西に声を掛けていた。周囲もその様子が気になるのか、手が少し遅くなっていたりする。

「ううん。なんでもないの、ちょっとね」

失敗しちゃった。と苦笑いするが、その顔はとても辛そうだった。

「そう言えば、大西さんってさっきの休憩で藤田と何か話してなかった？」

そう言ったのは玉置だ。途端にざわつく教室。如何にも俺が何かをしたような言い回しはきっと意図的な物だろう。もし、あの場に居たのなら先輩の姿も見えているはず。それなのにそれは言わずに俺と大西の問題にしてきた。

「そういえば」

玉置の発言に何かを思い出したのか、一人の女子が声を漏らす。

「休憩時間に夕紀ちゃんと彼氏見かけたけど、なんか夕紀ちゃん俯いて彼氏に慰められてた」

きっと甘味喫茶の後だろう、あのままずっと何かを気にしていたのか大西は。

これはまずい予感がする。この流れは良くない。

だが、俺は大西が何を思っているのか知らない。どうして劇の最中にも申し訳なさそうな困った様な表情をしていたかも分からない。そんな状況では何も弁解出来ない。そうやって俺が内心焦っていると。

「変な憶測で夕紀まで追い詰めんじゃないわよ！」

「そもそも！夕紀と先輩が一緒に居たなら、智之が夕紀と話していた時だって居たはずでしょ」

「なのに、さも智之が夕紀に何かしたような言い方じゃない？」

「それに、もし智之が夕紀を悲しませるようなことをしたなら、その時に先輩が黙っているはずないわ」

木村が言う非の打ち所が無い正論によって、ざわついていた教室が静かになった。玉置を見ると、自分の持ちかけた火種が消火され

た事を特に気にした様子もなく、薄い笑みを浮かべていた。
「騒がして悪かったわね。とりあえず先に今日の片付けと、明日の準備を終わらせましょう。夕紀の事はあたしに任せて」
木村がそう締めくくることによって、作業を中断していた者も、自分の仕事へ戻っていった。
「智之、あんたもちょっと来て」
特にする準備も片付けもなく、誰かを手伝おうかとしていたら木村に呼ばれた。木村はそのまま大西を連れて教室を出ていってしまった。後を追うように教室を出ると、木村と大西はすでに階段の方へ向かっていた。
なんとか付いて行くと、向かった先は屋上へ続く階段だった。
「ここならあまり人が来ないし話しにくいことでも話せるでしょ」
大西はその言葉にビクッとしてから、こちらを見てきた。
「その様子じゃやっぱり智之に関係することね」
「俺にはよく分からないんだが」
木村が、鋭い目付きでこちらを見てきた為慌てて反論する。本当に俺には理由が分からない。嘘は言ってないと思う。
「夕紀？明日も劇はあるんだから、ちょっとした不満でもなんでも良いから今言っちゃいなさい」
クラスの代表としての意見なのか、大西の親友としての意見なの

か、それともそのどちらもなのか、優しく大西に話しかける。

「でも…」

何かを迷うように、俺と木村の間で視線を泳がせている。その表情はどこか叱られている子供のようだった。

「何を言ってもあたしが許すから」

「ちょっと待て俺の意見は」

「文句ある？」

最近木村がとても自由だ。

「えっとね？」

こちらを伺うように、大西は話し始めた。結局俺の意見は大西の中でも却下されたようだ。まぁ別に良いんだけれども…。

「佑樹くんと一緒に甘味処の列に並んでたの…」

大西は休憩時間の出来事を木村に説明し始めた。それを聞き、俺は何かマズイことをしでかしていたのかと冷や汗をかいていた。なぜなら、俺の名前が出てきてから木村が「やっぱりお前か」といった顔で睨んでいたのだ。

「それでね？その時智之くんが私を苗字で呼んできたことがなんだか胸が苦しくて…」

「折角仲良くなれたのに、ただの知り合いみたいに扱うから…なんだか寂しくなっちゃって」

「は？」

さすがの木村も大西の言い分が少しオカシクなってきた事に気が付いた。

「やっぱ変だよね？」

「それで落ち込んでたの？」

「うん…」

はぁーっと長い溜息を吐き出す木村。なにか、傷付けるようなことをしたのかと思った俺も、瞬間的にほっと息を吐きそうになった。

「夕紀…あんたそれあんまり良くないよ…」

そう言いながら、チラッとこちらを見てから大西の耳元で俺に聞こえないように何かを話し始めた。

「あう…」

途中から大西の顔が赤くなったり、真剣な表情になったりしていた。

「分かった？」

「うん…最近幸宏くんにも相談した」

「自分でも分かってたのね」

俺を置いて行きながら、二人で何か結論が出たようだ。

「んで、俺はどうすればいいんだ」

別に気にしては居なかったが、やや不機嫌そうに演出しながらそ

う言うと。

「とりあえず、あんたは特に何もしなくていいわ。夕紀の問題だったから」

「ごめんね智之くん…」

本当に申し訳なさそうに頭を下げる大西に、俺はバツが悪くなり。

「夕紀、ちゃんとそう呼べばいいんだな」

俺が、余計な気を遣わなければ良かった話しだ、という結論にした。前回の事がある意味トラウマになっており、少し自分に厳しくし過ぎたのかもとも思った。

「あちゃー…」

何故か、木村が顔を覆い本日何度目かの溜め息をついていた。

「うんうん！遠慮しないで呼んで！」

その一方、大西は餌を貰った子犬のように嬉しそうな様子だった。動く度に揺れる長い栗色の髪が、さながら子犬の尻尾のように揺れていた。

第五話　三度目の気遣い（後書き）

故意か天然か

第六話　三度目の弱虫

大西の問題も解決した事で、文化祭二日目の一般公開も無事に迎えることが出来た。

一般公開と言うこともあって、今日は午前二回、午後二回と回数も増やしている。

その内の午前二回を大盛況の内に終え、今は昼休憩の真っ最中だ。

「午後のほうが人来るんだろ？教室入りきるのか？」

俺は昨日と同じく、幸宏を連れ昼飯を物色していた。昨日は、お好み焼きとクレープを食べたので、出来れば違うものが食べたいところだ。

「ん～まぁ口コミってのもあるし、かなり人来そうだからなー」

幸宏は、グラウンドで買った串焼きを食べながらそう言ってきた。

「午後は舞台を少し下げて客席数増やすか。まあ、まずは相談だな」

舞台の位置を少し下げればもう一列分ぐらいは客席を増やせるだろう。その分人形を操る俺達のスペースが狭くなるが、仕方ないことだろう。

「そうだなー。一応余裕持って設置してあるし、立ち見ぐらいは増やせるだろう」

そうと決まれば、作業は早めにしたほうが良い。俺は近くにあっ

たソース焼きそばの出店と駄菓子屋で昼飯を素早く済ませ、教室へ戻ることにした。

教室に戻るなり、木村に客席を増やすことを提案、少し渋っていたが午後の事を考えたのか作業は開始された。

「人がギリギリすれ違えるぐらいしか無いわね」

思い切って舞台を下げた為、舞台の内側は随分と狭くなっていた。舞台裏に置かれていた荷物なども移動し、なんとか人がすれ違える程度までは確保できた。

「これだと、移動結構ハードよね」

「出番が終わって捌ける時、注意しないと足とか踏みそうだな」

「まぁ何とかしなさい。あんたが考えたことなんだから」

了承はしたものの、実際移動してみた結果が気に入らなかったのか、ジト目で俺を見てくる。

「なんとかなるだろ」

しかし、俺はそんな楽観的な考えだった。幸宏が言っていた通り、元々余裕をもって作られていたので、昨日演じていた時はこれぐらいのスペースしか使っていなかったように思えるので、やってみれば見た目ほど苦労はしないはずだ。

そして迎えた午後の一回目の上演は俺が予想した通り特にトラブルもなく終えることが出来た。実際やってみて感じたことは、やや圧迫感があり、演じる者同士が思ったよりも近くに感じるといった

ぐらいだ。それと、壁が近くなった事で、声がより反射して客席に大きく届いてしまう事を指摘された。

「文化祭もあと少しで終わりか」

うちのクラスの出し物も残す所あと一回。他のクラスも、売り切れなどが出てきているという。うちの学校は特に後夜祭などはなく、グラウンドでゲートなど燃やせる物を燃やし、キャンプファイヤーのようにするぐらいだ。

なので、うちの学校の文化祭では今が一番盛り上がる時間だろう。

「なんで夕紀ちゃんの誘いに乗らなかったんだ？」

日も傾きかけ、色が付き始めた教室に男が二人寂しく水飴を食べていた。勿論、俺と幸宏だ。

「彼氏が待ってるだろ」

「折角、俺と智之と木村に夕紀ちゃん。四人で周ろうって言ってくれたのによ」

休憩に入る時、何故か大西が俺達二人を誘ってきた。

「智之だって、夕紀ちゃんがお前のこと気にしてるの分かってるんだろ？」

「ああ」

勿論分かってる。どこぞの二次元な世界に住む鈍感主人公じゃあるまいし、あれだけ顔に出されれば、好意を持ってもらえている事に気付く。

「実は俺、夕紀ちゃんにお前の事相談されてたんだよね…あれ？言ったっけ」
「この間口滑らせただろ」
「聞いた時ショックだったぜー？だってあんな可愛い子に話があるのとか言われて、聞いてみたらお前の事なんだから」

幸宏は、なんだか無理矢理笑っている様な苦笑を浮かべながらおどける。

「そこまで気が付いててなんで断ったんだ？」

苦笑を止め、真剣な顔でそう尋ねてくる。その顔を見て、俺は少しだけ本音を言うことにした。

「少し、怖いんだ」
「怖い？」
「失敗するのが怖い」
「嫌われるのが怖い」
「失うのが怖い」

その全てに“また”と付くことを隠しながら俺は幸宏にそう言った。

「だから慎重に動いてる」
「そうか…」

それっきり俺達は、休憩時間が終わるまで黙って、水飴を舐め続けた。

文化祭最後の上演。どのクラスメイトも気分が盛り上がり、妙なテンションで劇は続いた。人によってはアドリブを入れたり、本当に泣く子も居た。
そして劇もクライマックス。数多くの世界を渡り歩いた王子が、漸くヒロインを探し出し、遂に告白をする場面だ。

「僕は貴女ともう一度出会うために幾つもの世界を渡って来ました」
「なぜそんな事をしたのですか…」
「貴女を一目見た時から僕は貴女を運命の相手だと思ったのです」
「私なんかでは、貴方のような高貴なお方と釣合いません…」
「貴女が愛してくれたのは王子と言う肩書きですか？それとも僕自身ですか？」
「それは…」
「僕は例え生まれた世界が別であろうと貴女を愛しています」
「私も…私も愛しています！」

とても王道で、見る人が見たら陳腐な話だろう。しかし誰もが望む最高のエンディング。

―ハッピーエンド―

俺は劇に自分の気持ちを込めた。

「例え」

この時、俺はきっと文化祭で一番感情が乗った台詞を言っていただろう。

「何度…何度生まれ変わろうとも僕（おれ）は貴女を幸せにしてみせます」

そう言った瞬間、隣から息を飲む音が聞こえた。そして、その台詞を最後に幕が降りた。
どうやらアドリブは概ね好評だったようで、客席からは拍手が聴こえる。
劇の終わりを告げるアナウンスと同時に、教室に明かりが戻る。
そんな中、大西はじっと俺を見ていた。

「皆さんお疲れ様でした」

片付けも残った物は撤収日に何とかすることになり、今は木村が纏めの挨拶を始めた所だ。

「担任が劇をやるなんて言い出した時はどうなるかと思いましたが、なんとか二日間無事終えることが出来ました」

皆がうんうんと頷いている。因みにその担任は今、職員質で会議中だろう。

「あたしはただ、全体の監視してただけなので、特に活躍はしてません」

木村も十分頑張ってたぞー。などという声も出ているが木村はそれを止め。

「ここは、やっぱり主演の二人に一言ずつ貰うのが良いんじゃない？」

ニヤっと笑いながら俺と大西を呼ぶ。周りの奴からしたらその笑顔も可愛らしく映るのだろうが、俺にはやはり悪魔の笑顔にしか見

えなかった。

「まずは、王子役の藤田智之からどうぞ」

「俺からかよ」

「男なんだからウダウダ言わずにやりなさいよ」

普段は、レディファーストなどと言う口から何を言うか。

「えーっと…」

注目されていることに、少し硬くなりながら、俺は必死に感想を纏めようとした。

「正直俺にこんな大役が務まるとは思わなかった」

俺が話し始めると、何故かみんな静まりかえっていった。

「人前で演技をするなんて特に苦手だしな」

「でも、みんなに支えられて上手く出来たと思う。本当に助かった。ありがとう」

そう、頭を下げるとすぐに拍手をされた。それは隣に立つ大西からだった。その拍手を切っ掛けにしてクラスメイトからの大きな拍手が俺を包んだ。

「はい、なんともつまらないコメントありがとう」

ほっとけ。

「んじゃ、夕紀」

そう促され、大西は一歩前に出て喋り始めた。

「私はきっと相手が智之くんだったから上手く出来たんだと思います」

その発言に、俺の時とは別の静けさがクラスを包んだ。

「智之くんは台詞を覚えるのも早くて、なんとかこの人に付いて行こうと思って練習も沢山しました」

この瞬間、漸くクラスの空気が少し緩んだような気がした。全く紛らわしい言い方をする子だ。

「一日目少し失敗しちゃったけど、今日は全力で頑張れたと思います」

「でも」

「最後の智之くんの台詞は反則だと思います！」

は？きっとみんなそう思っただろう。感想から抗議にシフトチェンジされ、まだ俺は付いていけない。

「あんな台詞を真横で聞かされて、なんだか私が告白されてるみたいで…もう！」

「とにかく、あんなに感情が入った台詞をアドリブで入れてくるなんて、事前に言って欲しかったよ」

アドリブを事前に打ち合わせ…。

そんな大西のテンパリ具合を止めたのはもちろん木村だ。

「ストップ！ストーップ！」
「理恵もそう思うよね！？」
「はいはい分かったから落ち着こうねー」

興奮冷めやらぬ、と言った様子で木村に縋り付く大西。その大西の口を手で塞ぎながら木村は纏めに入った。

「色々あったけど、大成功ってことで！みんなお疲れ様でしたーーーーっ！解散！！」

その日の帰り道。

「なあ」
「なんだ」
「まだ不安あるのか？」
「まあな」
「あんだけ気に入られても…か」
「ああ」
「弱虫め」
「…」
「いだだだああ！ギブッギブッ！！」

第六話　三度目の弱虫（後書き）

それをトラウマと言う気がする

第七話　三度目の異変

文化祭が終わり、日曜日、さらに振替休日と休みが続き、漸く昨日の撤収日に文化祭の名残も消えた。
それに伴いクラスでは、明日に控えた生徒会選挙の公示に備え、立候補者の有無を話し合っていた。

「うちのクラスからは生徒会副会長一名と書記二名の三人で決まりかー？」

副会長は言わずもがな、大西だ。書記には木村と、驚くことに幸宏が立候補した。

「それじゃあ、立候補した者は、それぞれ選挙活動のサポーターと決めておく事。それじゃあＨＲを終わりにする。号令！」

選挙活動のサポーター。今回は木村も立候補している為、クラスの女子が大西の手助けをするだろう。しかし、木村はなんとなく分かるが、幸宏はまたなんでこんなチャレンジをしたのだろうか？

「なあ勿論サポーターやってくれるよな？」

そうこう考えていると、当の本人が目の前に現れた。前の席に座っている幸宏だ。

「その前に、なんでお前は立候補なんて」
「ちょっと待ちなさいよ。智之にはあたしのサポーターになってもらうんだから」

これは俺の言葉を遮るように右から現れた木村の発言。しかし、何処からそんな発想が生まれてくるのか、ちょっと心配になるぞ俺は。

「えっと、智之くんサポーターお願いできないかな？」

後ろからおずおずと声を掛けてくるのは大西。生徒会役員の立候補者を決める前にあった席替え。その結果が、今出た通りの席順になったのだ。俺の前に幸宏、右に木村、後ろに大西。

席替え直後にこの大惨事では、先が思いやられる。因みに教室での位置は廊下側の後ろだ。昼休み、購買にいち早く行けると幸宏は喜んでいた。

「どっか別の所に意識飛ばしてないで誰のサポーターになるかさっさと決めなさいよ」

右の悪魔は逃避すら許してくれない。まさに悪魔。

「何か言った？」

普通にしていれば、ショートカットの黒髪美人なのに、なんでそう凄むかなこの子は。

「いや？ただ、理恵の髪少し伸びたなって」

「なっ！？」

瞬間湯沸し器発動。

「智之、後ろで夕紀ちゃんが唸ってるぞ」

「ん？」
「うーうーー」
とても可愛い生き物が居たので取り敢えず撫でておく。ラブコメ臭が半端無いが今はこれで話を誤魔化しておく。
「それで、誰のサポーターになるんだ？」
誤魔化されないという、空気が読めない男が一人いた。
「んじゃ幸宏で」
「んじゃってなんだよ！んじゃって！」
サポーターになってやろうってのに贅沢な奴だ。
「それじゃあ他の奴にするかな」
「俺の他に、智之をサポーターにしたいなんで奇特な人は…」
なんだかこんな話の流れに覚えがあるな。
「あたしが居るけど？」
「私もーーーー！」
「そうだった！」
何を馬鹿な事をしているのやら。しかし、困ったな。いつの間にこんな状況になるほど仲良くなった？
「それじゃあ2日交代でサポーターになってもらうってのは？」
選挙期間は公示する日から一週間。実際に選挙活動をするのは選

挙前日の立候補者演説までの６日間だ。その６日間を三人で分けると言うことか。

「俺は別にいいけど、そうすると俺が居ない残りの４日間はどうするんだ？」

「そんなの他の友達に頼むわよ」

「なら６日間友達に頼めよ」

「嫌よ」

「なんでだよ」

なんで木村がそこまで俺にこだわるのかが分からなかった。ひょっとしてこいつ俺に気があるんじゃ…なんて単純な脳みそは勿論持ち合わせていなかった。

「文化祭で上がった、あんたの知名度を利用したいのよ」

「俺の知名度？？」

そんなものが、いつ出来たのだろうか。

「まがりなりにも、劇で主役をやった生徒が有名にならない訳無いでしょ」

「ま、俺もそれに乗っかろうと」

悪気を感じさせずに爽やかにそう言った幸宏。なんかイラッと来たのでアイアンクローをしてやった。

「馬鹿やってないで、理由に納得いったならどうやって二日間分けるか決めましょう」

こいつは…本当に俺の意見を聞こうとしないな。

こうして俺は半ば無理矢理三人のサポーターを押し付けられた。

「嫌なら良いのよ？」

「別にそこまで嫌じゃねぇよ」

◇

―サポーター一日目―

「今日は幸宏か」

適当にやろう。

「おい！そういうことは思っててもロにするなよな！」

「悪い、ロに出てたか」

「思いっきり口にも態度にも出てるわ！」

そう言って俺を指差す。俺は今昇降口に設置されたベンチで横になっていた。

「生徒会書記候補―えーっと苗字なんだっけ。まあいっか。幸宏をよろしくお願いしまーす」

「鈴田だよ！鈴田幸宏！チラシにも幟にも書いてあるだろ！」

昇降口に居る生徒は皆クスクスと笑いながら通りすぎていく。

「ホント頼むぜー…」

これはこれで成功だと思うんだが。認知度的に。

―サポーター二日目―

「あんた…巫山戯たら蹴るわよ」

「さーいえっさー」

ガスッ

こいつ、本気で蹴りやがったっ！

「もう一度だけ言ってあげるけど、巫山戯たら殴るわよ？」

「生徒会書記候補！木村理恵！木村理恵をよろしくお願いします！」

「ちゃんとやれば出来るのにあんたってホント馬鹿ね…」

木村が何か言っていたような気がしたが、必死に働く俺には何も聞こえなかった。

―サポーター三日目―

「また幸宏か…」

「今日は真面目に頼むぜ？」

「分かった分かった」

「生徒会長候補〇〇〇〇さんをどうぞよろしくお願いします！」

「俺を応援しろよ！」

これもまぁまぁ受けてたな。

―サポーター四日目―

今日は大西のサポーターのはずなんだが…選挙活動をすると言っていた場所に大西の姿は無かった。

「確かにここだったはずなんだが」

大西が選挙活動をしていたのは昇降口を出て右側、体育館のある棟と教室がある棟の間だ。ここは、テニスコートやグラウンドが近いこともあって、運動部を中心に知名度を上げることが出来る。

体育館で部活をしているバドミントン部やバスケ部、バレー部などにはある程度顔を知られているだろう、大西ならではの場所選びだと思った。

「電話してみるか」

そう思い携帯電話を取り出す。すると、すぐ側にある体育倉庫から物音がした。放課後なので物音がしてもおかしくはないのだが、やけに大きな音だったので少し気になった。怪我人なんかが出ていたら大事だ。

携帯電話を制服のポケットに入れると、俺は倉庫へ向かった。

「誰か居るのか？居るなら返事か何かしろー」

体育倉庫の電気は点いていなく、埃と体育倉庫ならではの鼻にツンと来る臭いで充満していた。

ガタガタッ

どうやら人は居るようだ。仕方が無いので電気を点けようとしたが、どうやら電球が切れているようで点かなかった。手探りで得点板や、ボールの入ったカゴなどを避けながら奥へ進んでいく。

「おい、どういうことだ」

そこで見たのは、男子生徒に抑えつけられている大西の姿だった。
怒りで沸騰するよりも早く、冷えていく頭は状況を正確に理解しようとした。
衣服の乱れはある。が、幸い乱れているだけで既に乱暴をされた後ではないようだ。
手は白い紐で結ばれ、足も同じように結ばれている。
口は布か何かで塞がれているようで、上手く言葉を発せられない。
俺を見る眼が涙で一杯になるのが、高い位置に設置された窓からの光の反射で分かった。
漸く物音に気が付いたのか、男子生徒がこちらに振り向こうとする動きが見て取れた。

人数は二人。
何やら携帯電話を持っている奴と大西の身体を押さえつけている奴だ。
俺は、こちらに比較的近い、携帯電話を持っている生徒の襟首を引き寄せ、そのまま地面に転がす。
転んだ拍子に落とした携帯電話を、拾おうとした生徒の手ごと革靴の踵で踏みつける。

「――――――っ」

声にならない声を出しながら、手を踏まれた男子は床を転がり続けた。

「お前誰だっ」

漸く事態が飲み込めたのか、大西を押さえつけていた男子も腰を

上げ、こちらに身構えてきた。
胸に付いている胸章の色から、一年生だということがここで分かった。
「先輩に対する態度がなってないな…」
別に普段そんなことは気にしないが、今はそんな気分だった。
こちらを睨みつける男子の体格は俺よりも少し大きめで、幸宏を少し太くした様な感じだった。
こんな男子に抑えつけられて大西はさぞかし怖かっただろう。
「ここで何していたんだ？」
少し近付くと、大西は自分の姿を俺から隠すように横を向き、身を丸めた。
ここまで近付くと、その後ろ姿が小刻みに震えているのまで分かる。
「何をしていたんだ？」
一向に答えない眼の前の男子に嫌気が差し、足を大きく踏み鳴らす。
密閉された倉庫に思ったよりも大きな音が響いた。
「う、うるせぇ！」
その音に驚いたのか、男子生徒は俺に向かって手を伸ばしてきた。
その手を外側に避け、すれ違うように腹部に膝蹴りを入れた。避ける時に何かを踏んだような気がした。
腹を掛けて倒れていく男子を見ながら足元を見ると、さっき踏み

つけた携帯電話が、さらに砕けていた。
倒れている二人に適度に追い討ちをかけた後、大西に声を掛ける。
「もう大丈夫だ」
すると
「ふっ…くっ…グスッ…ヒック」
泣くのを我慢している大西を解放するべく、縛っている紐を解く。解いていく事に泣く声は大きくなり、解き終わる頃には大声を上げて泣いていた。そんな大西を俺はずっと撫で続けた。

大西が泣き止むのを待ち、保健室へ送った後、俺は体育倉庫に残してきた二人を問い詰めていた。
「上級生に命令された、と」
少し脅したらすんなり吐いた。
「誰かは教えられない、と」
二人は激しく頷いていた。ここで俺は少し探りを入れることにした。
「口は開かなくていい。ただ、今から言うことが合ってたら素直に頷け」

二人は少し考えた後、ゆっくりと首を立てに振った。俺の予想通りならすぐ終わる。

「二年ではなく三年」

頷く。

「部活の先輩」

頷く。この二人が部活に入っている事はさっきの尋問で分かっていた事だ。

「それも女子の」

この発言に二人は少し肩を震わせた。別におかしな話ではない。全て、俺の経験したことから導き出した答えなのだから。都合三回の経験値を舐めてもらっては困る。

因みにさっきの荒事も場数の違いでしかない。都合青春三回目にもなれば、それだけそういった場面にも出くわす。元々喧嘩に強いわけではないので、もっと大人数で、喧嘩慣れしている上級生に囲まれたら、どうにもならない。

「バドミントン部の女子三年」

これがこの二人に命令をした犯人だ。

「それもキャプテン。女子バド部の部長か」

目の前の二人は眼を見開き、俺の顔を見てくる。なぜそんな事が分かるのかと言った表情だ。

「もし、次こんなことがあったら」

そう言いながら俺は二人を解放する。今回の事を大事にしても、大西にとって良い事が全くない。

ただ、先輩には言っておく必要がある。

体育倉庫から出て、そのまま外階段を上がり体育館へ続く通路を歩く。先輩も、この時間ならまだ部活中だろう。

体育館へ入り、バドミントン部が居る場所を探す。どうやら、今日はステージ側で練習をしているようだ。

「先輩」

数人の三年生がこちらを振り向く。当然先輩だらけな事を失念していた。

「藤田君？」

ラリーをしていたのか、相手の部員に会話した後、こちらに目当ての先輩が来てくれた。

「どうしたんだい？もしかして入部？」

汗のかき方から笑顔から全てにおいて、爽やかな雰囲気を出しながら、そう聞いてくる。

「いえ、夕紀の事で少し」

「夕紀？」

その訝しげな評定は、俺が夕紀と呼んだことに対してなのか、それとも俺から大西について話を振られることになのかは分からなかった。

「さっきまで、夕紀が体育倉庫に監禁されていました」
「なんだって！？」
「詳しい話は向こうで」

大きな声を出した事で注目を浴びてしまっていたので、俺は先輩を体育館の周囲を囲む通路に促した。

「夕紀は無事なのかい」
「今は保健室に居ます」

こうして俺は、今回の事件の概要を先輩に伝えた。大西が、乱暴されそうになったことはぼかしながら。

「そんな…」

犯人の予想も伝えたが、先輩の反応は鈍かった。

「先輩からも一つよろしくお願いします」

先輩から、例の元カノに一言警告をしてもらえれば、きっと大西に対する嫌がらせは終わるはず。もう既に嫌がらせの域を出ているが。

「しかし、そんな事が…」

どうやらまだ犯人が信じられないようで、必死に何かを振り払っているようだった。

「とりあえず俺は保健室へ行きます」
「僕も行こう」
「いえ」
「今の先輩を連れていくわけにはいきません」
「なんだって？！」
「夕紀の事を思うなら夕紀をちゃんと見てあげて下さい。今の先輩は夕紀を苦しめるだけです」

そう言って俺は、先輩の返事も聞かずにその場を離れた。体育倉庫の出来事から少し興奮気味だったせいで、余計なことを言ったような気がしたが、紛れも無い本心だった。

「失礼します」

保健室の独特な匂いを嗅ぎながら、俺は大西を探した。

「大西さんならお母様が迎えに来て帰ったわよ？」

ベッドを直しているのか、カーテンの向こう側から先生の声がする。どうやら少し遅かったようだ。

「そうですか…様子はどうでした？」
「落ち着いては居たようね」
「ただ、すごく貴方の事を気にしていたわよ」
「俺の事を…ですか？」

一体何を気にしていたのだろうか。怪我をしていないことは、保健室へ運ぶ最中に確認させたし。

「貴方を自分の問題に巻き込んだんじゃないかって」

「そんなこと…」

それは俺が望んだことだ。むしろ俺の願いだ。大西の人生に関わっていくことこそ、俺がここに居る目的なのだから。

「気を付けなさい」

「何をですか？」

「女の嫉妬は恐ろしいわよ？」

その言葉を聞き、俺は一刻も早く今の状況を変える為ある決意をした。どんな結果になっても、きっと状況は変わるはずだ。

良くも悪くも…。

第七話　三度目の異変（後書き）

少しの変化の積み重ねが大きな変化になるもの

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8886x/

俺が望む最高のハッピーエンド

2012年1月2日01時50分発行